

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第134集

有 東 遺 跡

—第20次発掘調査報告書—

平成14年度 富士見台宿舎新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 2

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第134集

有 東 遺 跡

—第20次発掘調査報告書—

平成14年度 富士見台宿舎新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 2

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

有東遺跡は登呂遺跡の北東約1kmの地点にあり、登呂遺跡の母胎となった集落跡とされている。かつては馬捨場遺跡とされており、昭和5年発行の静岡県史では径が約16~18m、高さ1.8mの墳丘を有する古墳、もしくは墳丘墓とそこから出土した組合式木棺が紹介されている。さらに、同遺跡出土遺物について加藤明秀・芹沢長介両氏により昭和13年の『考古学』誌上に弥生文化の特徴の一つでもある大陸系の石器などに関する論考が掲載されている。

当遺跡が有東遺跡として全国的に有名であるのは、登呂遺跡の前段階の集落であるからだけではなく、昭和22・23年の後藤守一・杉原莊介両氏による発掘調査による成果が大きく影響しているのではないかと思われる。その調査では、遺跡の北部からは弥生時代後期の土器が、中央部では弥生時代中期の土器が、南部からは土師器が出土するとされ、非常に複雑な遺跡であることが認識された。このことにより、調査地点毎の遺跡名が付けられ、今回の調査区周辺の中央部とされる地点が有東第一遺跡、北部が有東第二遺跡として報告されている。この時点において、有東遺跡が長期間にわたる広範囲の遺跡であり、おそらく居住域が時期によって異なっていることを明らかにしている点でも先見の明があった。

この報告のなかでは、有東第一遺跡出土の有東式土器が南関東地方の宮ノ台式土器と深い関連性があることが指摘されている。推測ではあるが、この有東式段階の本格的農耕集落の生業を主とする生活のシステムが東国へと拡散したのではないかという予想があったのではないかとも読みとれる。現在では、須和田式段階のより古い集落跡が多く発見されており、この段階での地域間の交流や文化的な差異と共通性が問題視されている。今回の調査ではこの時期に相当するようより古い土器も多く出土しており、他地域との繋がりを考えるうえで、非常に貴重な資料となるであろう。

また、登呂遺跡が近々再発掘調査され、弥生時代の集落像に新たな知見がもたらされている。登呂遺跡は洪水で埋没した短期間の集落跡であると考えられていたが、古くは弥生時代中期中葉の土器が出土し、後期段階では何度かの建物の建て替えや洪水以後の集落の再建も確認された。発見された遺構では環濠より規模の小さな区画溝、床下に防湿構造のある平地式住居跡、小区画畦畔の存在などが注目される。有東遺跡においても新たな視点でこれまでの20次に及ぶ調査内容を見直し、登呂遺跡同様より深化した前段階の有東集落像の復原に努めるべき良い機会ではないかと思われる。

現地調査および本書の作成にあたっては、国土交通省静岡営繕工事事務所並びに静岡県教育委員会・静岡市教育委員会をはじめとする関係機関各位の御理解と御協力に厚くお礼を申し上げたい。また御多忙のなか御教示をいただいた静岡大学名誉教授 伊藤通玄氏と静岡市立登呂博物館の皆様には深く感謝申し上げる。現地での景観写真撮影の折りには静岡市立商業高等学校長 中村半一郎氏に御配慮をいただいた。その他、御指導・御助言をいただいた方々や、雨の中でも辛抱強く作業にあたられた現地作業員の方々、短期間の内に要領よく報告書をまとめられた整理作業員の方々にこの場を借りて深く感謝する次第である。

平成14年9月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例 言

- 1 本書は、静岡県静岡市富士見台一丁目3番地に所在する有東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富士見台宿新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、国土交通省中部整備局 静岡営繕工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 調査期間は、平成14年4月1日から平成14年5月31日まで現地調査を行い、平成14年6月1日から平成14年6月30日まで資料整理を行った。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成14年度

所長：斎藤 忠 副所長：飯田英夫 常務理事：条田徳幸

総務課長：木杉昭一 会計係長：大橋 薫 相談員：平野吾郎

調査研究部長：山本昇平 調査研究部次長兼資料課長：柴野克巳

調査研究部次長兼調査研究二課長：佐野五十三 主任調査研究員：柴田 瞳

- 5 本書の執筆は第II章第1節を佐野五十三が、その他を柴田瞳が担当し、遺物写真は当研究所職員が撮影した。
- 6 現地調査にあたっては、静岡市教育委員会、静岡市立登呂博物館、静岡市立商業高等学校より過去の調査に関わる資料や情報の提供を受け、様々な便宜を図っていただいた。
- 7 基準点および水準点の設置を鈴フジヤマに委託した。
- 8 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 9 本調査に関する資料は静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡 例

- 1 調査区の座標軸は、国土座標VII系を用いた。
- 2 本書で使用した方位は、上記の方位（座標北）である。
- 3 遺構の略号はSD（溝状遺構）、SF（土坑）、SK（畦畔）、SP（小穴）、SX（性格不明遺構）を用いた。
- 4 挿図中の出土遺物の表記は、「●」の多くが土器を示し、また、土器は「P」と略称している場合もある。「▲」または「W」は木製品で、「■」または「S」は疊または石器を示している。
- 5 土器実測図で、口径が不明瞭であるものは中心線を外し、ある程度根拠のあるものは中心線を一点破線とした。
- 6 木製品実測中のドットは欠損部もしくは剥落痕、濃色部は炭化範囲を示している。
- 7 石器実測図中の平・断面図周辺の実線は研磨範囲、破線は敲打範囲を示している。
- 8 土層および土器の色調は、新版『標準土色帖』小山正忠・竹原秀雄1999年版を使用した。

目 次

序
例言
凡例

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法と調査経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的・歴史的環境	2
第2節 基本土層	7
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	
第1節 発見遺構	10
第2節 出土遺物	12
第Ⅳ章まとめ	
第1節 弥生時代の有東集落について	30
第2節 有東遺跡出土の弥生時代中期上器について	31

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	3
第2図 有東遺跡1～20次調査区位置図 (菊田1997『有東遺跡第14次調査報告書』 静岡市教育委員会を参考に作成)	4
第3図 調査区全体図	5
第4図 調査区東・北・西壁 土壙図	8
第5図 SF1、SK1、SX1、SD2平・断面・遺物出土状況図	11
第6図 遺物出土状況図	12
第7図 木製品実測図	13
第8図 石器実測図(1)	16
第9図 石器実測図(2)	17
第10図 石器実測図(3)	18
第11図 土器実測・拓影図(1)	20
第12図 土器実測・拓影図(2)	21
第13図 土器実測・拓影図(3)	22
第14図 土器実測・拓影図(4)	23
第15図 有東遺跡16次出土遺物 (岡村1997『有東遺跡』 静岡市教育委員会より転載)	33

挿表目次

表1 土層説明（番号は第4図に対応）	9
表2 造構一覧	10
表3 木製品一覧	14
表4 石器一覧	15
表5 土器一覧	24

図版目次

図版1 1. 調査区周辺の景観（西より、左奥は富士山、中央右が調査地点）	図版5 1. SF1、SP5・6・11～13（南より）
2. 東区全景（南西より）	2. SF1 遺物出土状況（南西より）
図版2 1. 西区全景（西より）	3. 上器（No147）出土状況（南より）
2. SK1 土層断面（南より）	4. 石器（No14）出土状況（北より）
図版3 1. 西区全景（北東より）	5. 土器（No85）出土状況（北西より）
2. 有束遺跡周辺の景観（西より）	6. 石器（No1）出土状況（北西より）
3. SK1（南より）	7. 土器（No43）出土状況（北より）
4. SP2・3（南西より）	8. 上器（No40）出土状況（北より）
5. SD1（東より）	図版6 1. 西区西壁土層
図版4 1. SD2（北より）	2. SX1 出土土器(1)
2. SX1（西より）	3. SX1 出土土器(2)
3. SX1 遺物出土状況（南東より）	図版7 1. 出土石器(1)
4. SX1 遺物出土状況（南より）	2. 出土石器(2)
5. SX1 遺物出土状況（北より）	図版8 出土土器（26～53）
	図版9 出土土器（54～84）
	図版10 出土土器（86～133）外面
	図版11 出土土器（86～133）内面
	図版12 1. 出土土器（134～150）
	2. 出土木製品

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査に至る経過

有東遺跡は登呂遺跡が形成される以前の弥生時代中期の拠点型の集落であり、静清平野における初期の本格的農耕集落でもある。水稻農耕を主たる生業とする弥生文化の東日本への波及過程を理解するうえで、非常に重要な位置を占めている遺跡である。

有東遺跡の調査は確認調査などの小規模なものを除くと今回で20回目にあたるとされている。現在の当遺跡周辺は工場、商店や民家が林立しているが、昭和22・23年の第1次調査（今回の調査区周辺とされている）時点では、周辺は水田地帯でありほとんど建物も無かったようである。南北に走る県道高松日出線を挟んだ西側には方形周溝墓群が発見された第6次調査地点（静岡市立商業高校）があり、東側には第12・17次、南側に第18次（合同官舎）、北側に第8・10次（SBS通りの北側歩道）調査区があり、居住域が確認されている。微高地上の居住域の周辺に墓域が形成されているのは弥生時代中期段階の様相とされ、後期以降は前半段階の建物跡が少數確認されてはいるが、ほとんどの地点が徐々に水田化されているようである（第2図参照、菊田2002）。

今回の調査地点は有東遺跡の周知の範囲内であり、居住域の南東部にあたり、本調査前に静岡市教育委員会により平成14年1月に確認調査が実施された。その結果、上層に水田跡、下層に集落跡が存在する可能性が指摘され、平成14年4月から当研究所により本調査が実施されることになった。

第2節 調査方法と調査経過

発掘調査は準備を含めた現地調査を平成14年4月1日より5月31日まで行い、継続して6月は資料整理を研究所本部にて行った。7月以降は報告書の校正などの補足的な作業を行った。

4月は前半に事務処理や資器材の調達と作業員の雇用など発掘調査の準備を行い、後半には本格的な発掘調査を開始した。

前半の準備期間には、国土交通省静岡営繕工事事務所、静岡労働局と当研究所により、今後の調査工程などについて三者協議がもなれた。また、静岡市教育委員会からは確認調査に関するデータの説明を受けたが、過去の調査に関する詳細な説明や現地での指導なども必要に応じて随時受けた。

現地での準備作業では、調査範囲を確認し、コンテナハウスや調査区周囲のフェンスなどを設置し、測量用の基準点（GPS利用）と水準点（一級水準点から移設）の設置も併せて行った。水準点に関しては、静岡市教育委員会が設置した静岡市立商業高校側の交差点の街頭のポルトの高さは10.422mであったが、今回の測定では10.165mと25.7cm低いとのことであった。ちなみに、平成以降の調査ではこのポルト高を利用しているものが多いとのことであった。

後半の発掘調査では、バックホーによる表土除去作業を開始したが予想以上に堆土の処理場が狭く、一度に調査区全体の発掘が不可能になったため、現地での緊急の三者協議により調査区を東西に分割し、二度に分けて発掘を行うことになった。このことにより、当初予定の工程より現地作業は遅れる結果となってしまった。

発掘調査は東区より開始し、人力による中間層除去作業と遺構確認作業を開始した。上層では水田遺構のプラン確認を行なったが検出できなかつたため、5層土を掘削し、5層下面で遺構の確認作業を行った。5層土内の下層からは土器破片を中心とする多量の弥生時代中期の遺物が出土したが、それらが伴

う遺構は多く検出できなかった。

4月22日には雨天による地下水位の上昇により水捌けが悪くなり、水没した調査区の排水作業を行った。小雨であれば排水の比較的良い地盤であるが、雨が1日降り続くような天気であると翌日には排水作業が必要な状態になってしまい、これ以降3回ほど現地は水没の被害に遭った。

人力による掘削が終了した地点から、測量と写真撮影を並行して実施した。

5月に入って東区はバックホーにより埋め戻しを行い、西区の表土除去作業も開始した。第2・3週は雨天が多く作業がはからなかったが、5月中には現地での発掘調査は終了した。

西区も東区と同様の調査工程で作業を継続したが、人力による5層の除去作業中の遺物の出土量は西区の方が比較的少なかった。しかし、発見された遺構数は多かったため、人力による遺構の掘削作業に並行して写真撮影や測量も実施した。

5月後半にはバックホーにより西区を埋め戻し、撤収作業を行った。

6月からは出土遺物や記録した図面や写真的資料整理を行い、報告書を作成した。

前半はボリコンテナーに約10箱出土した土器、石器や木製品の洗浄・注記作業を主に行い、同時に各種台帳類を作成した。注記は「20SUT番号」とした。

中旬は土器の接合・復原作業を主に行い、後半は遺物の実測作業を中心に行った。この期間には、その他遺構図面の編集、トレース作業、遺構・遺物の観察表作成、遺物写真撮影、写真的編集、原稿執筆、収納作業なども行った。

(柴田)

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

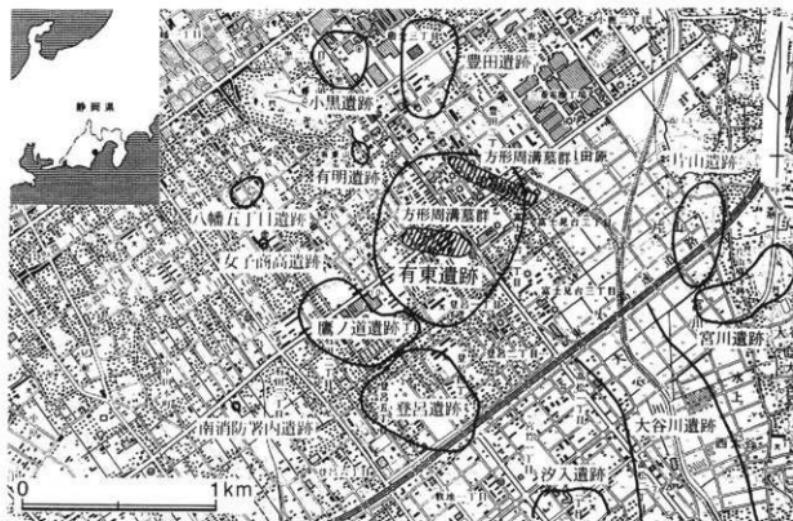
有東遺跡は、静岡県中部地域における弥生時代中期の主要な遺跡である。静岡平野は、旧国道一号線が分水嶺となり、南側が静岡市久能海岸に注ぐ大谷川水系、北側は静岡市から清水市を経て折戸湾に注ぐ巴川水系である。この地域の弥生時代中期の拠点的集落として、前者の大谷川水系に有東遺跡が、後者の巴川水系には川合・瀬名・瀬名川遺跡が立地している。またこの水系には、弥生時代中期から後期、古墳時代前期にかけて活発な人々の生活の痕跡が残されている。今回の地理的・歴史的環境では、弥生時代から古墳時代前期の環境について概観する。

有東遺跡は、JR静岡駅の東南東約2kmにあり、その範囲は南北900m、東西750mに及び、現在の地名で、有東・豊田・富士見台・登呂という地域が該当する。今回の調査区は、静岡市富士見台一丁目3番地に所在し、周辺の標高は約10m程を示している(第1・2図参照)。

有東遺跡の立地する地形は、西側にある安倍川の形成した扇状地、東側の有度丘陵から排出された砾で形成された小扇状地、南の海岸に発達する砂州・砂丘がつくる後背湿地という三者の要因により形成されている。大谷川は東西間の低地を流れ、有東遺跡はこの上流の後背湿地とその縁辺に展開している。

この静岡市内の平野地形の形成時期については、堆積土層中に約2,900年前の伊豆天城山カワゴ平から噴出した火山灰が確認されることから、繩文時代後期から晩期には形成されていたと推定される。さらに、これ以降、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、弥生時代の小海進により、平野の湿地化が進行し「登呂層」といわれる黒色有機質土が堆積する。

以上、このような地理的環境を前提として、次に静岡平野における弥生時代の遺跡のあり方を概観してみたい。



第1図 周辺遺跡分布図

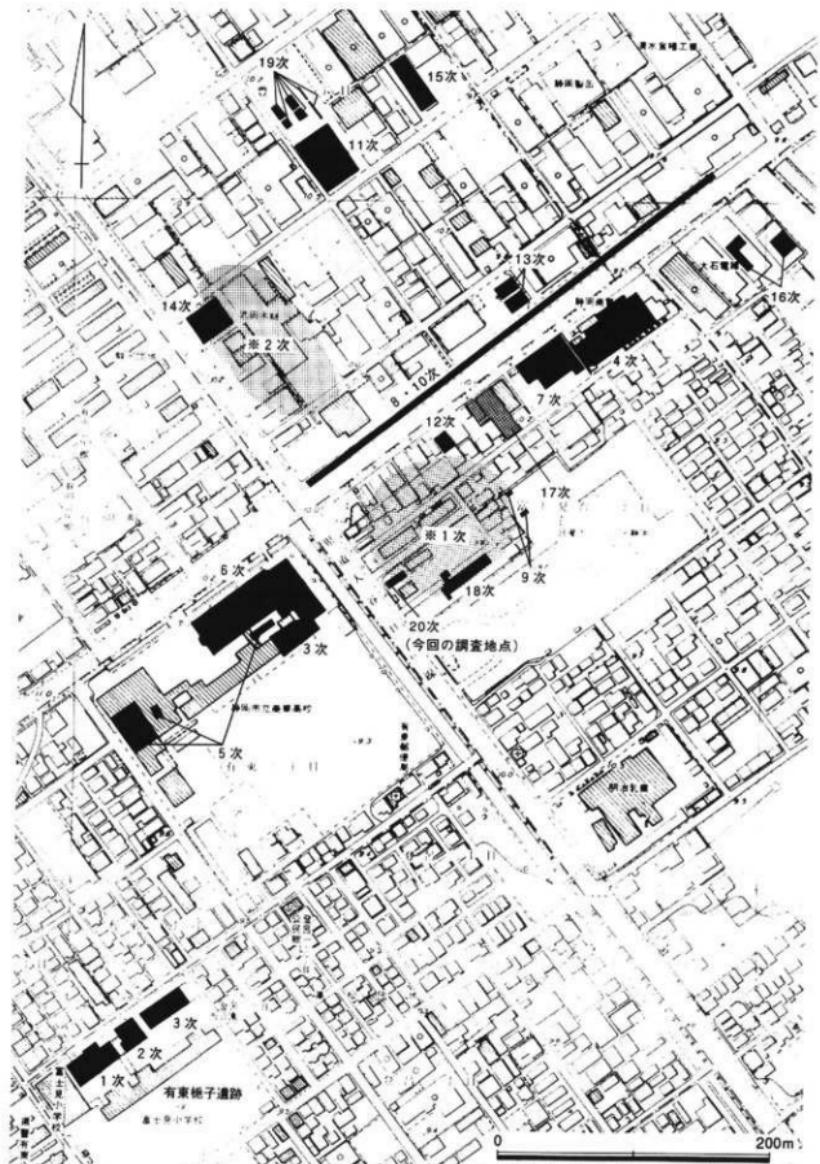
静岡平野周辺には弥生時代前期の遠賀川式土器や水神平式土器を出土する遺跡は見られないが、縄文時代中期以降の土器が周辺の低地の遺跡で出土している。

弥生文化の波及期の遺跡として、「丸子式土器」の指標となっている静岡市丸子遺跡があげられる。この遺跡は平地との比高差50m以上で標高約70mの山丘斜面に立地する高地の遺跡である。その内容は明確ではないが、弥生文化波及期の遺跡として注目される。なお後述する西山遺跡でも丸子式土器の出土がみられる。一方、平野での調査例として、静岡市瀬名遺跡6区では水田と推定される面から丸子式土器が出土している(静文研1994)。このように弥生文化波及期に位置づけられる弥生中期前半の状況は、断片的な事例が散在する状況である。

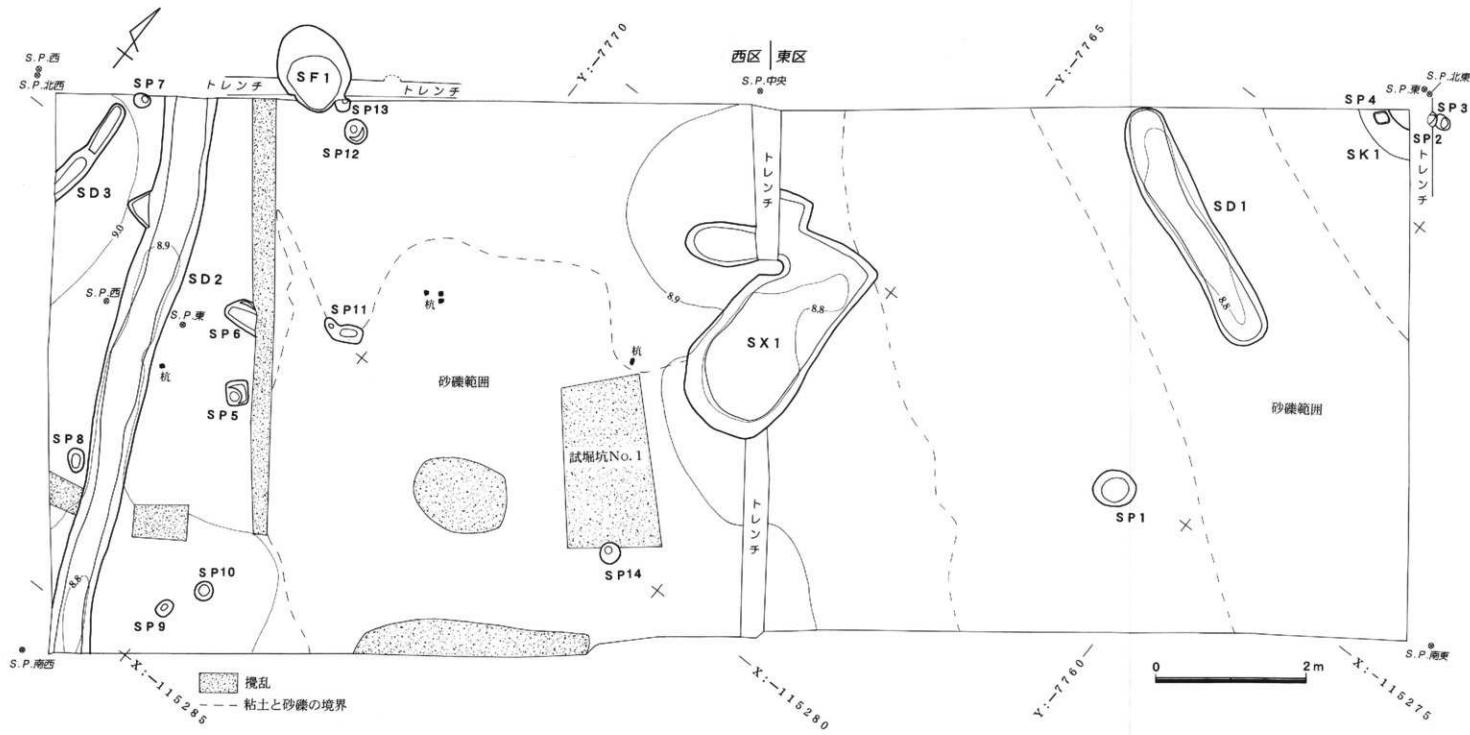
弥生時代中期中葉の遺跡としては、安倍川西岸丘陵の標高60m程にある静岡市西山遺跡(静岡市1985)があげられる。この遺跡では土坑が検出され、多くの土器とともに打製石斧が出土している。また先述した瀬名遺跡7区で、方形周溝基から瓜郷式と須和田式に比定される土器が出土している。また清水市原添遺跡は、有東式土器の先行形態の土器を出土し、調査では大型の井戸跡が発見されている。この時期は低地への進出が確実に開始されたと思われるが、その様相については未だ明確にはされていない。いずれにしても、この時期の遺跡数は少なく、低地への進出が開始されても、高地依存から脱却していない状況で、生産活動及び社会的体制に不安定な様子がうかがえる(登呂博物館1988)。

弥生時代中期後半の時期は、低地への進出が完成する時期で、平野単位で大規模な拠点的な集落が成立している。この時期の主要な遺跡が静岡平野の駿府城内遺跡、平野の南側の有東遺跡と、北側の川合・瀬名・瀬名川遺跡である。これらの遺跡では、住居跡・方形周溝墓・水田等、当時の生活を彷彿とさせる遺構・遺物が数多く発見されている。また瀬名遺跡1区出土の木棺人骨が、山口敏氏により渡来系弥生人と同定されたことも特筆される(静文研1994)。

国特別史跡「登呂遺跡」に代表される弥生時代後期は、遺跡が激増する時期にあたる。それ以前の3



第2図 有東遺跡1~20次調査区位置図(菊田1997「有東遺跡第14次調査報告書」静岡市教育委員会を参考に作成)



第3図 調査区全体図

倍程度の増加がみられるという(登呂博物館1988)。これらの遺跡は古墳時代前期まで継続するものが多く、弥生海進により生じた地下水位の上昇による低湿地化に伴い、水田及び用水路維持のため、杭・矢板打設等の大規模な工事を実施している。この時期の主要な遺跡として、静岡市下島・鷹の道・有東・小黒・駿府城内・上ノ山・宮川・川合・瀬名・瀬名川遺跡、清水市長崎・殿屋敷・飯田・下野遺跡等がある。

(佐野)

第2節 基本土層

狭隘な調査区ではあるが、弥生時代中・後期相当の標高差が東西で0.2mほどある。調査区の西側はかつて久能街道が存在していたことからも、表層では比較的標高が高いと考えられている。ただし、10次調査では西側の6次調査(第2図参照)で発見された方形周溝墓群との間に低地が入り込んでいる可能性が指摘されている(鈴木1993)が、今回の調査結果では、低地への移行を示す痕跡は確認されず、西から東へと緩やかに傾斜していることが再確認された。ただし、東隣の18次調査とは標高差がほとんどない(菊田氏教示)。ここでは調査区東側の堆積層の区分が明瞭であることから、東壁の土層(第4図上段)を基本土層として以下に説明する。

現地表面の標高は10mで、現代の盛土が0.5m、その直下に近現代の水田耕作土(1層土)が存在する。

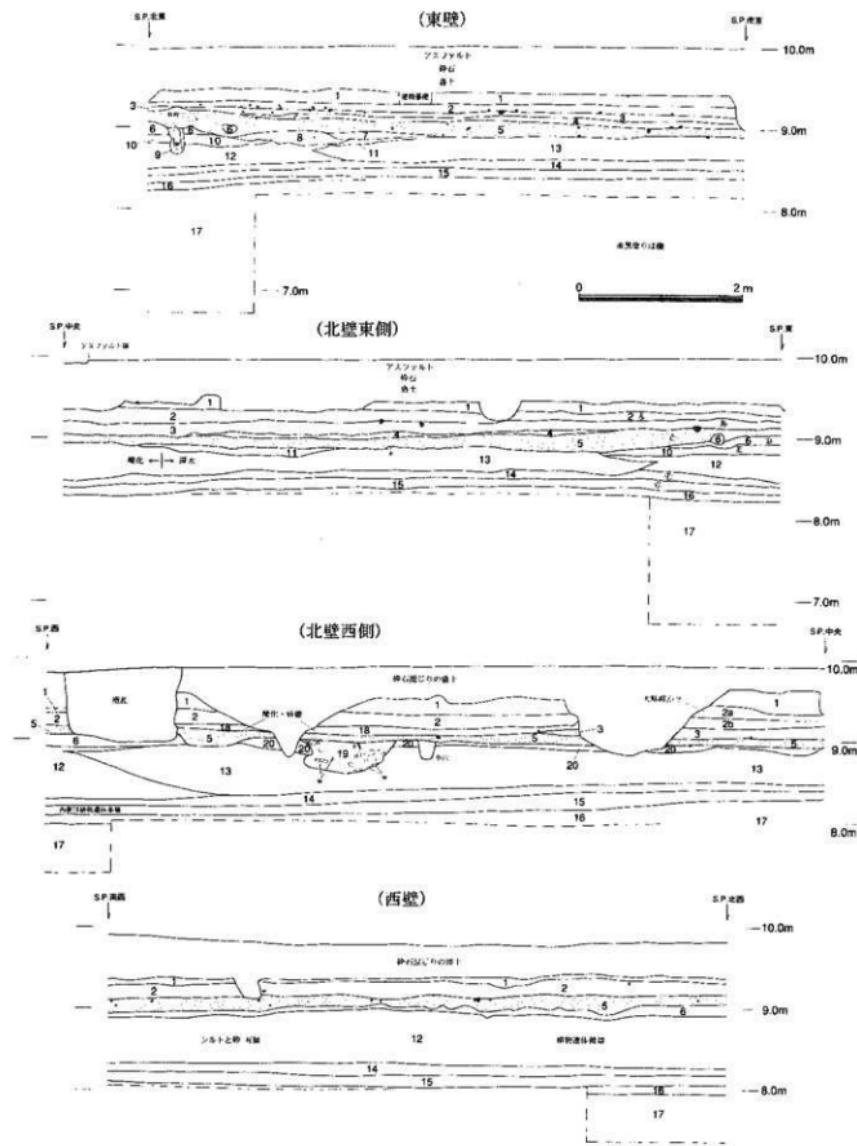
2層土は1層土に類似した水田耕作土であるが、堅い鉄分の塊が多量に認められた。北壁の中央部では隣接する擾乱の影響もあるかもしれないが大畠畔状の高まりが確認されている。古墳時代の土器片(第11図32)が出土している。

1・2層土とより下位の土層とは異質であり、また、1層土から約50cm下で弥生時代面に到達するところから、上層土の削平や流失、地盤の隆起や圧密化の影響も指摘されている。これらについての明確な回答を今回の調査では得ることができなかつたが、2層土から出土した土器の存在やこの遺跡が静清平野に出現した初期の本格的な農耕集落である点を考慮すると、弥生時代以来微高地であった可能性は高い。無論、厚い盛土による圧縮をかなり受けているようである。微高地に位置していることも影響しているかもしれないが、今回の調査区ではかなり水捌けが良かった点が意外であった。雨天時には水を吸収してしまうため雨による直接の被害はなかったが、地下水位の翌日の上昇により調査区内が滞水してしまったことが4回ほどあった。水稻農耕を當むにあたって、この地下水位の影響はかなりあるものとされており、この地下水位の変動が土壤にもおおきな影響を及ぼしているものと推定される。

3層土は黒色土で、細かな灰色粘土ブロックが多く含まれている。このブロックが水田耕作による攪拌時に混入したものか堆積時の周辺の土壤侵食によるものは、にわかには決めがたいが、その灰色粘土に相当する土壤が調査区内には存在しない。

4層土は3層土に類似しているが、やや明るくシルト質である。3・4層土は東側部分のみに認められ、5層土の盛り上がりを畦畔として継続利用しながら、おそらく、水田耕作を行っていたものと考えられる。

5層土は10~20cmの層厚があり、弥生土器が多量に出土している。上層からも遺物は出土したが、下層もしくは下面から発見される場合が多かった。これは、5層土が乾燥状態となり、クラック内に土器が落ち込んだためと考えられ、土壤が乾燥した時期があったものと推測される。ただし、未分解の有機物も5層土内に多く存在することから、乾燥は一時的なものと考えられ、水稻農耕に伴う人為的な水量調節が行われていた可能性もある。出土土器の多くが中期のものであったが、わずかではあるが後期に属する例も存在する。砂礫を下層より巻き上げており、草の痕跡も多数確認した。下面には、5層土の



第4図 調査区東・北・西壁 土層図

表1 土層説明（第4図に対応）

層位	土層 説 明
1	暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 粘土、下部に鉄分結核集中、炭化物微量、白色微粒子多量 (近現代水田)
2	オリーブ黒色 (5Y 3/1) 粘土、鉄分結核集中、白色微粒子 (火山灰?) 多量、炭化物微量、 $\phi 1 \sim 3$ cm礫少量、酸化マンガン少量、縦很多い (水田)
3	黒色 (5Y 2/1) 粘土、灰色粘土ブロック多い、下部に炭化物多い、 $\phi 1 \sim 3$ cm礫少量 (古墳前期水田?)
4	黒褐色 (10YR 3/1) シルト質粘土、共生土層包含層、縦根多い、 $\phi 1 \sim 3$ cm礫少量 (弥生後期水田)
5	黒色 (10YR 1.7/1) 砂礫混じり粘土、弥生中期土器包含層、 $\phi 1 \sim 3$ cm礫多量、縦根多量、 $\phi 1$ cm大炭化物多い、赤道体遺跡多量 (弥生後期水田)
6	緑灰色 (7.5GY 5/1) 粗砂混じり粘土、5層土をブロック状に含む (10層土と5層土の混じり、8層が掘削部分か)、管鉄多量 (耕野、床土)
7	褐灰色 (10YR 4/1) シルト質粘土、管鉄少量、 $\phi 5$ mm炭化物多い、6層土が混じる (搅拌か、やや白い) (床土?)
8	黒褐色 (10YR 3/1) 砂礫混じり粘土、10層土をブロック状に含む、 $\phi 1$ cm炭化物多量、管鉄多い (6層盛土の掘削部分か)
9	5層土と10層土が混在 (SP 2)
10	暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 粗砂混じり粘土、管鉄少量、還元
11	黄灰色 (2.5Y 4/1) 砂礫混じり粘土、管鉄少量
12	黒色 (2.5GY 2/1) 粗砂 (下部シルト)
13	暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂礫、礫は $\phi 3$ cm以下多量、西側酸化、北側インターフィンガ
14	灰色 (7.5Y 4/1) 粘土、炭化物と脊椎動物のラミナあり、縦位置の茎あり
15	黒色 (10YR 1.7/1) 粘土、植物遺体多量、縦・横位置の草あり
16	灰色 (10Y 4/1) シルト質粘土、植物遺体少量、縦位置の茎あり
17	灰色 (N 4/0) 粘土・シルト・細砂互層、ラミナ発達
18	黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂礫層、 $\phi 2$ cm以下の礫多量、酸化
19	黒色 (5YR 1.7/1) 粘土、 $\phi 1 \sim 2$ cmの炭化物多い、6・20層土をブロック状に含む、拳人の礫少量 (埋め戻し)
20	灰色 (10Y 4/1) 粗砂混じり細砂、管鉄少量、礫を多く含む

混在（6層）があり、明らかに耕作による影響が認められる。この厚い遺物包含層の形成の主要因は明瞭であるが、長い草遺体の痕跡の存在などからすると、長期継続的な水田経営が行なわれていたとは考えにくい状況ではある。

5層土は北側隅部に柱状の高まりが確認されたが、この地点の下部には東西方向の大柱状の盛土があり（SK 1）、それを踏襲していたかのように5層土が高まっており、その高低差を埋めるように3・4層が堆積している。

5層の下面には、13層のような砂礫層がある。約40cmと比較的厚く堆積しており、この層と12層の砂層（西側は砂とシルトの互層）が5層以上の微地形に大きな影響を与えているものと考えられる。12・13層は洪水により比較的標高の低い西側に厚く堆積し、そのため5層以上の地形は高低差が逆転している。

14～17層はストライプ状に粘土～細砂が互層に堆積しており、15層には植物遺体が多量に含まれていて、遺物は出土していない。

18層以下は西区で新たに発見されたもので、番号と層序が一致していない。18層は5層直上に薄く堆積した酸化砂礫層であり、2・3層中に含まれる小礫に関連する可能性があり、古墳時代以降も大きな洪水の影響を受けているものと考えられる。20層は5層直下の細砂層で、この20層を掘り込んでSF 1がつくられている。SF 1の埋積土が19層で5層類似土であるが20層土をブロック状に含み、埋め戻されている。

第III章 発見された遺構と遺物

第1節 発見遺構

個別遺構の大きさや挿図番号などについては表2にまとめたのでそちらを参照していただくとして、ここでは調査時の所見や時期的な問題点について遺構の種類毎にまとめる。平面調査で発見された遺構は5層下面で全てのプランが確認されており、SP12・14を除く遺構内の埋積土は5層土が主体であり、ほとんどの遺構が弥生時代のものと考えて良いであろう。

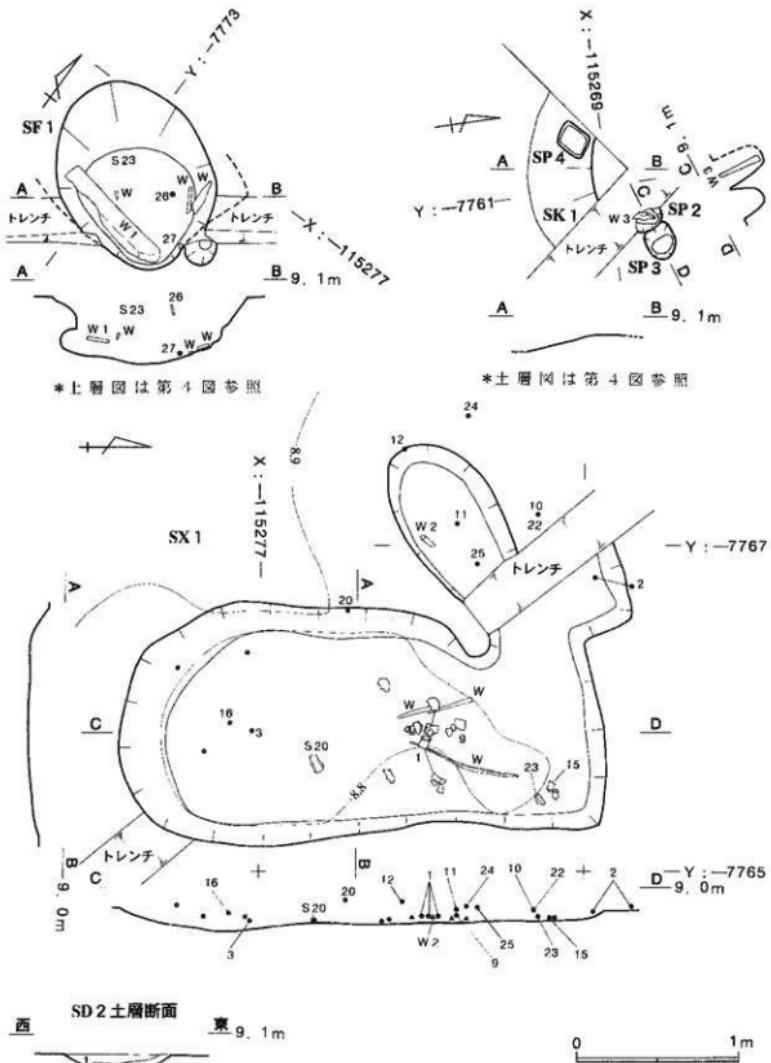
(1)畦畔 調査区北東隅にSK 1が存在する。SK 1は10層土と5層土が混在した盛土で、土留め用の矢板?を埋め込んだSP 2などが付随する。SK 1上の5層土の高まり部分は攪拌されているようで明確な畦畔を認定することができなかったが、この地点は標高が高く、水利面からすると継続した畦畔がつくられていた可能性は高いものと思われる。溝を作わない周堤帶の可能性も残る。

(2)溝状遺構 3条の溝状遺構が確認されている。SD 1は深さが約10cmと浅く、弥生土器片が少量出土したのみで人為的に掘削されたものかは不明である。SD 2も深さが約10cmと浅く、弥生土器片が微量出土したのみである。下層土内にはベースの10層土がブロック状に存在し、水が流れたものと思われ、上層は水田耕作によりかなり攪乱されているものと推測される。高低差から判断すると北から南へと流れたようである。SD 3は当初小穴として調査したが、何とかプラン確認を行った結果、細溝が検出された。南側がやや深く、水田耕作によりできたものと考えられる。

(3)土坑 調査区の北西壁際にSF 1が存在し、埋め戻し時に一部調査区を拡張して確認した。断面形態は袋状を成しており、おそらく掘削時の湧水により土坑壁面が崩れたものと考えられる。大粒の炭化物と共に一部炭化した草物や木片と台石が出土しており、埋積土の状態からすると人為的に埋められている可能性がある。底面から弥生時代中期中葉の土器片が出土している。

表2 遺構一覧

挿図番号	遺構名	平面・断面形態	大きさ(cm)	底面高(cm)	備考
第4・5図	SK 1	弧状	-	盛土高90	高さ10cmの盛土、矢板?
第3図	SD 1	U字形	345×69	876	
第3・5図	SD 2	U字形	50~72	878	南側が低い、侵食?
第3図	SD 3	U字形	30	890	段あり、南側低い
第4・5図	SF 1	横円形	117×93	857	横・台石出土、炭化物多い、埋め戻し
第5図	SX 1	不整形	300×159	873	北西部浅くプラン不明、炭化物多い
第3図	SP 1	横円形	58×48	877	人型
第5図	SP 2	-	20以上	870	加工木片出土
第3図	SP 3	横円形	24×18	880	斜めに埋められている
第5図	SP 4	長方形	18×15	889	浅い
第3図	SP 5	方形	32×30	889	段あり、内側22×18
第3図	SP 6	-	52以上×36	878	段あり、東側不明
第3図	SP 7	横円形	22×18	879	小型
第3図	SP 8	横円形	34×21	885	浅い
第3図	SP 9	横円形	25×18	872	
第3図	SP 10	円形	26×24	878	
第3図	SP 11	不整形	52×24	884	小穴連結状、生痕?
第3図	SP 12	横円形	33×28	874	段あり、内側大きさ22×20
第5図	SP 13	横円形?	20×?	887	
第3図	SP 14	横円形	29×26	881	埋積土は6層土



1: 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土、縦根多い、φ 1~3 cm 繊少量
2: 灰色 (10Y5/1) 細砂混じり粘土、灰白色粘土 (10 剛土) をブロック状に含む (侵食作用)、管鉄微量

第5図 SF1、SK1、SX1、SD2 平・断面・遺物出土状況図

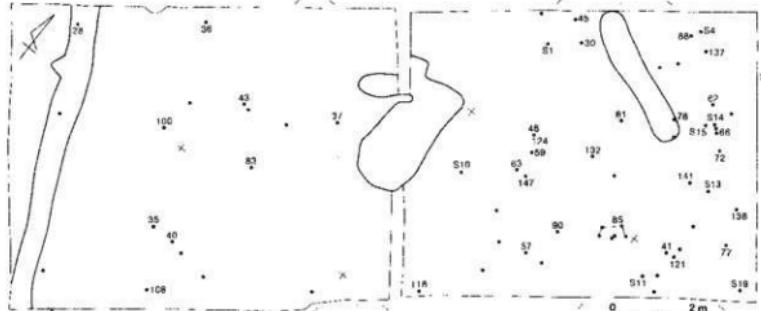
(4)性格不明遺構 SX 1は調査区中央部に位置しており、東西半分ずつ調査を実施した。南側は約17cmと深いが、北側は浅くプランは不明瞭であった。埋積土の状態からすると北西側にもう少し拡がっていたと考えられ、周辺出土遺物もSX 1出土として扱っている。埋積土は基本土層の5層土と等質的であるが、下層土はやや暗く、大粒の炭化物が多く含まれており自然堆積状であった。出土土器は比較的大型の破片で、弥生時代中期中葉の古い段階の資料が含まれている。その他、磁石や角材状に加工された木片や丸太杭なども出土しているが、杭は打ち込みが浅く、当遺構に伴わない可能性が高い。

(5)小穴 小穴は14基発見されたが、礎板を作りような明確な柱穴は無い。埋積土は5層土のものが多く、耕作時の擾乱や生痕との判別がつきにくい状況下にあったが、SP14は6層土が、SP12は13層土が埋積していた。

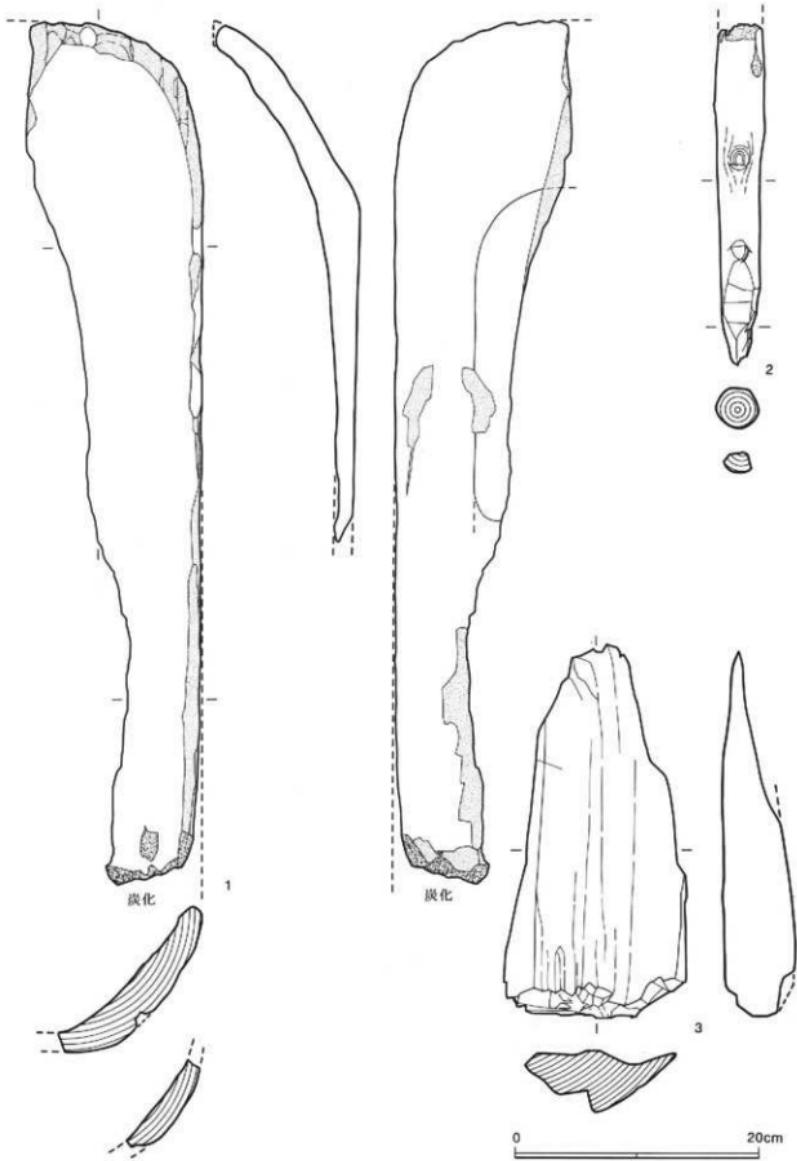
第2節 出土遺物

有東遺跡の発掘調査では大量の土器は言うに及ばず、多種類の石製品や木製品も必ずと言っていいほど発見される場合が多い。石製品は未製品と敲石や砥石といったその製作用道具の存在から集落内で生産されていたものと考えられており、木製品も未製品や大宗の削製石斧の存在から同様に類推されている。これらの素材を含めた道具の流通に関する問題については、拠点型集落から周辺小規模集落への供給といった未製品の有無による想定もされていたが、一般化するまでのデータに乏しく、むしろ、素材入手が容易な点では、一部の遠隔地の石材を利用したような特殊品を除いて自給的な生産活動を想定しておいた方が良いかもしれない。石器に関して言えば、素材の多くが安倍川の転石を利用しているとされており(伊藤1992)、それらは安倍川だけでなく海岸でも採集することができ、河口付近の海岸では15cmほどの転石が多く存在していた。ちなみに当遺跡から現在の安倍川や海岸までは2~3kmの距離であり、静岡市川合遺跡(平野1992)では大型品以外の石器素材の転石が集落内に搬入されている。また、輝綠凝灰岩製の磨製石斧が南関東地方へと搬出されており、土器に認められる遠隔地との濃厚な関係は交易だけではなく、様々な情報の共有化が図られた結果と考えられる。

出土土器は弥生時代中期の土器がほとんどであり、有東遺跡出土土器のなかでは比較的古いものが多い。これらの上器の胎土については、伊藤通玄氏により安倍川起源の胎土か否かについて一部肉眼観察を実施していただいた。その結果、多量の黒雲母や石英が混入しているものが多く認められ、堆積岩の多い安倍川流域の粘土とは異なるものとされた。この非在地的胎土とされるものはかなりの数量にのぼるものと考えられ、全てに対して粘土や製品の搬入を想定することには躊躇せざるを得ないが、今後の検討すべき重要なテーマの一つであることは確かである。



第6図 遺物出土状況図



第7図 木製品実測図

(1)木製品(第7図、表3) 1はSF1より口縁部を下に向けて人為的に埋められたような状態で発見された。多くの部分が欠失しており、図下端は炭化している。表面は腐食によりかなり瘦せて成形痕は不明、図上半部の口縁もかなり瘦せているが、元の状態に近いものと推定される。先端部側面の傾斜角度は約33度である。

2はSX1内に斜めに打ち込まれていた杭であるが、SX1との関連性は薄い。残存した杭上部が5層上部で確認されていることから、その段階での水田耕作により上端部が傷んだ可能性が高い。

3はSP2より、先端加工した図下部を下にして人為的に埋められた状態で出土した。表面は腐食が著しく不明な点が多いが、表面は削面を残し、下端部は細かな斜めの切削痕が認められ、下端中央部は折り取られているようである。小穴内に埋め込まれていたもので、矢板として良いかは検討の余地が残る。

これらの他に、加工木片が少數出土している。それらに使用された樹種は、SF1内の2点がアカガシ(プレバラート番号7708)とサカキ(同7709)で、SX1内の3点がスギ(同7705・7706・7710)であった。

表3 木製品一覧

※計測値は残存部

番号	種別	遺構・部位	幅 (mm)	長さ (mm)	厚さ (mm)	樹種	備考
1	削物	SF1	145	708	120	クスノキ	半裁材 横
2	杭	SX1	42	278	—	スギ	芯持ち材
3	矢板?	SP2	150	306	61	イスマキ	板目

(2)石器(第8~10図、表4) 1は石剣とか石槍と呼称されているものであるが、石材は軟質でかなり薄く実用品であるかは疑問が残る。当遺跡出土磨製石器に良く認められることとされているが、研磨による仕上げも難である(平野晋郎氏教示)。鎧も不明瞭で柄を付けても剣としては小型であり、儀器化したものとしておきたい。2も1と同じ石材であり石剣の可能性もあるが、おそらく砥石であろう。

3~13は刃部に細調整や使用痕が認められる剝片状石器で、横刃型石器、打製石包丁もしくは打製刃器とされるものである。これらの石器に関しては、機能や用途による特定の名称の付与が困難であるため、総称として剝片状石器とした。形態分類とそれらの使用法については山田昌久氏による分析がある(山田昌久1988)。当遺跡出土例(第4次調査による出土例)に限れば、刃部が直線的なものと外反するものがあり、使用痕には4つの類型があるとされる。使用痕は刃部に対して平行な擦痕①と斜交する擦痕②、刃部に面ができるくらいの敲打痕③、刃こぼれ程度の敲打痕④の4類型である。①や②に関しては当遺跡「発見の刃部磨製の石包丁との関連も考慮せねばならない」としている。「刃部磨製の石包丁」とは使用により刃部が擦れた剝片状石器のことと筆者自身は理解しているが、これに対して、顕微鏡を使ったコーングロスの分析結果は、石包丁としての用途には否定的な結論が提出されている(山田成洋、山田じょう1992)。県内では磨製石包丁の出土例は浜松市杣子遺跡(鈴木1984)・角江遺跡(勝又1996)と磐田市御殿二之宮遺跡(中輪1981)の3遺跡のみで、石包丁の代替品の存在は古くから指摘されていたが、山田氏等による分析結果を覆すだけの情報は現状ではなく、代替品を遺存しにくい材質によるものと推測する以外にはないとする状況となってしまった。

剝片状石器には複数の用途が想定されており、山田昌久氏が指摘するような様々な使用痕が観察されるものがあり、また、他の石器の素材として利用される場合もあったのではないかと予想されている。これらは川原石の1次剝片を利用したものがほとんどであり、刃部や周縁の整形を除く複雑な細部加工は

認められない。形態は楕円形で裏面に自然面を残す物（6～10）、上側縁を平坦に打ち欠いたもの（3～5）、両側縁を整形したもの（11・12）、自然面を残す剥片を剝離した際にできた母岩状の剥片（13）などが主なもので、大きさはいわゆる手のひらサイズが一般的であるが、大・小型品も少数存在する。これらは形態分類と用途が必ずしも一致するものではなく、最低限の機能が満たされれば、形態的な変異の幅が大きく、使用者による形態選択の許容範囲が大きいものと思われる。

また、素材剥片自体が石器としても利用でき、加工により削・撃器などの石器以外への転用（敲石を除く）も可能なような複合的な要素を持つ石器でもある。削・撃器として利用されたものは、使用痕から推測しても長期にわたり継続的に保管されて利用されたとは考えにくい状況下にあり、使い捨てに近い状態での利用が予想される石器である。そうした意味では評価しにくい石器であるが、景的には他の石器を凌駕しており、当地域では非常に重要な石器であったものと理解される。

これらの剥片状石器の系統的な問題に関しては、「剥片と器種との対応関係において、互換性に富むという一つの特徴ある体系を出現させた」（小野1986）縄文時代以来の技術系譜上に連なるものと思われる。今後は使用痕や石材などの詳細な分析と各地での在り方との比較検討が必要なのであろう。

15～19は敲石である。偏平な円錐（15・16）や楕円錐（17～19）が今回出土したが、この他にも球状や棒状の敲石などがある。球状のものには斑駁岩なども存在するが、多くは硬質の珪質凝灰岩が利用されている。偏平なものには軟質の中粒砂岩や斑駁岩が選択されている場合が多い。

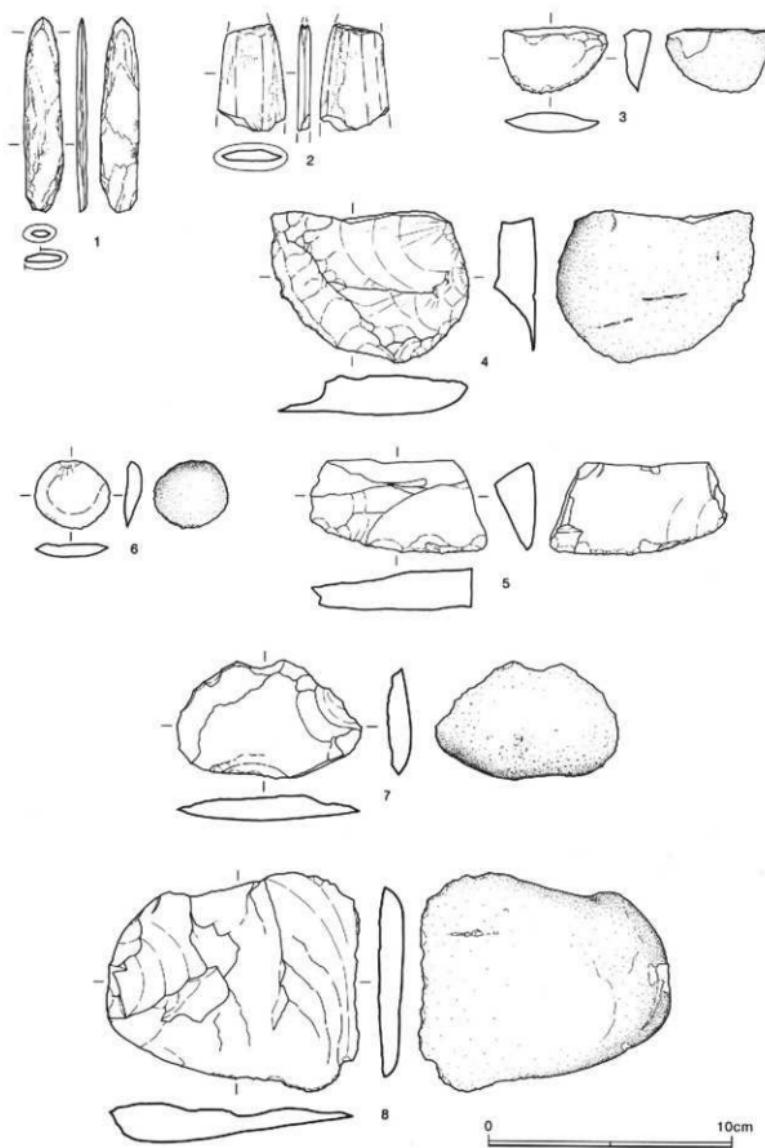
23は重量が3.4kgの台石であり、当遺跡からは比較的重い台石が多く発見されており、周辺からの採集が容易であったとも推測できるかもしれない。かなりの部分が欠損しているが、欠損部は摩滅しており、欠損後も使用されていたかもしれない。この台石は土坑内に廻棄されたような状態で出土した。

表4 石器一覧

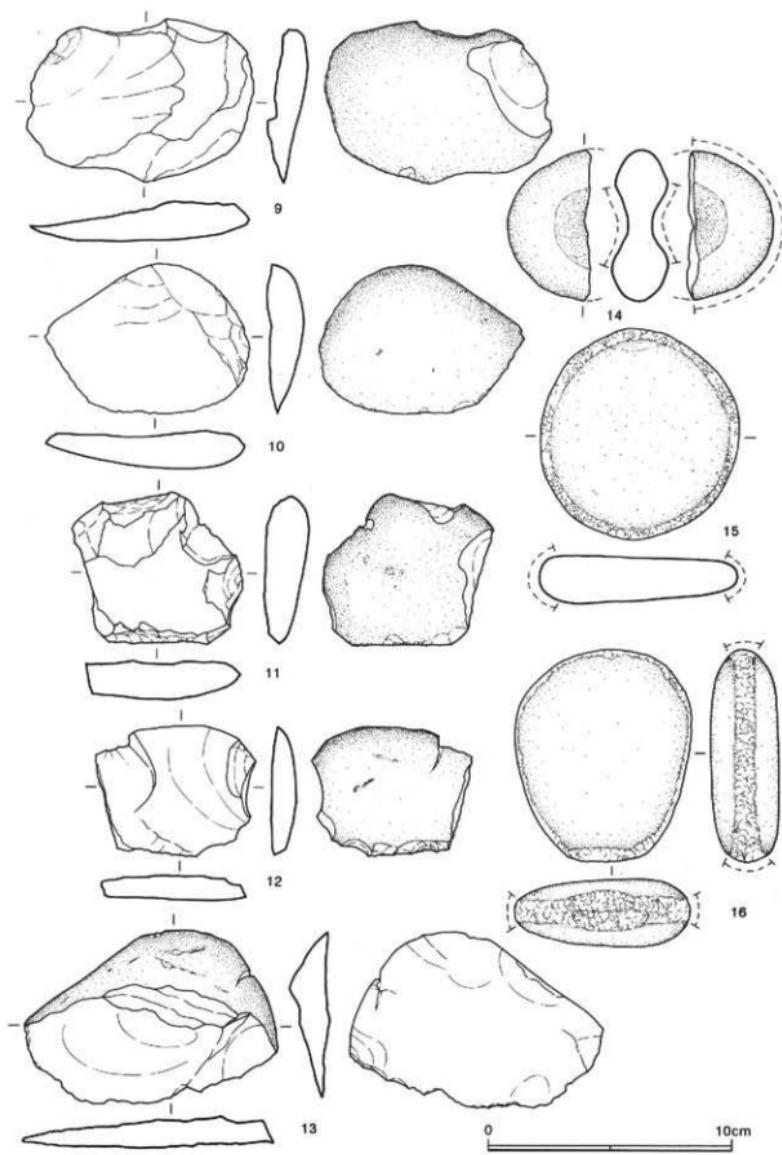
累計測定は残存部、単位はmm・g

番号	種別	遺構層位	取上 No	出土 標高	取上日	幅	長さ	厚さ	重量	石 材	備 考
1	石剣	5層下部	9	890	020422	15	80	4	8	緑灰色灰質粘板岩	瀬戸川層群、安倍川流域
2	砥石?	5層下部	—	—	020422	25	44	5	9	緑灰色灰質粘板岩	瀬戸川層群、安倍川流域
3	剥片状	5層下部	—	—	020418	41	26	11	12	暗灰色中粒砂岩	瀬戸川層群
4	剥片状	5層下部	3	840	020422	78	62	17	91	暗灰色細粒砂岩	瀬戸川層群
5	剥片状	5層下部	—	—	020423	67	47	17	52	暗灰色細粒砂岩	瀬戸川層群
6	剥片状	SX 1	—	—	020424	31	27	6	5	暗灰色中粒砂岩	瀬戸川層群
7	剥片状	5層下部	—	—	020423	76	48	10	45	暗灰色中粒砂岩	瀬戸川層群
8	剥片状	5層下部	—	—	020422	90	102	16	141	暗灰色細粒粘板岩	瀬戸川層群
9	剥片状	5層下部	—	—	020422	93	63	15	100	暗灰色砂質粘板岩	瀬戸川層群
10	剥片状	5層下部	53	852	020424	82	61	15	80	暗灰色砂質粘板岩	瀬戸川層群
11	剥片状	5層下部	27	890	020422	64	62	15	101	赤色凝灰岩	瀬戸川層群
12	剥片状	4層	—	—	020419	60	53	10	47	暗灰色中粒砂岩	瀬戸川層群
13	剥片状	5層下部	38	891	020423	103	70	15	111	緑灰色灰質砂岩	瀬戸川層群
14	凹石	5層下部	15	887	020422	—	—	23	58	灰色中粒砂岩	静岡層群、長尾川流域、吹貫
15	敲石	5層下部	18	888	020422	82	86	20	220	灰色中粒砂岩	静岡層群、長尾川流域、吹貫
16	敲石	5層下部	—	—	020422	72	87	28	264	灰色中粒砂岩	静岡層群、長尾川流域、吹貫
17	敲石	5層下部	—	—	020419	42	98	22	160	緑色硬飴岩	高草山層群
18	敲石	5層下部	—	—	020422	66	116	35	439	緑色硬飴岩	高草山層群
19	敲石	5層下部	52	889	020424	41	108	16	135	暗灰色細粒砂岩	瀬戸川層群
20	砥石	SX 1	10	878	020424	45	133	62	821	灰色玄武岩	高草山層群
21	剥片	5層	—	—	020507	52	38	10	18	赤色凝灰岩	瀬戸川層群
22	削器	5層下部	—	—	020423	49	53	12	29	黒色チャート	瀬戸川層群
23	台石	SF 1上層	—	—	020523	255	155	62	3404	軟質含鈣粗粒砂岩	静岡層群、長尾川流域、吹貫

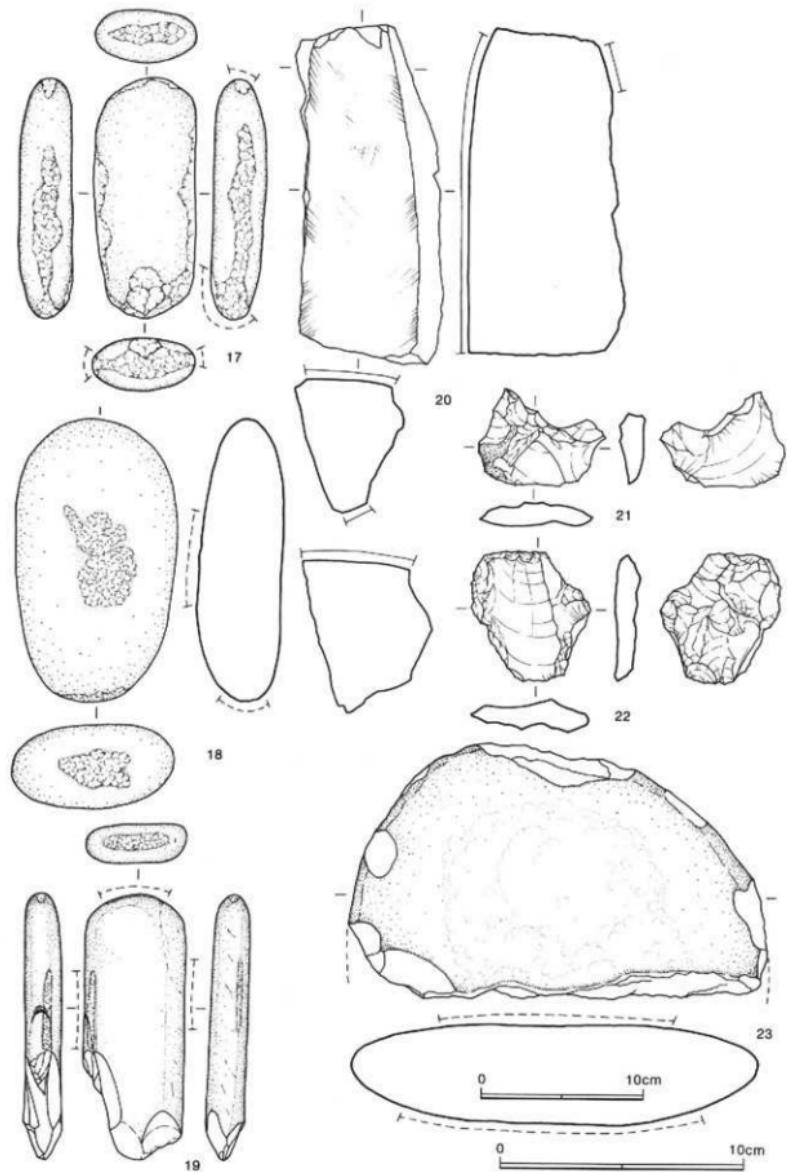
*木材鑑定は伊藤道玄先生による。備考欄は伊藤1992の文献参照。



第8図 石器実測図(1)



第9図 石器実測図(2)



第10図 石器実測図(3)

14~16・23の石材はやや粒子の粗い砂岩で、長尾川流域に認められるものとされているが、遺跡の北方に存在する八幡山や谷津山の露頭でも採集可能とされている（平野1992）。

今回の調査区からは、石斧が1点も出土していない点は注意すべきかもしれない。21は赤色凝灰岩で磨製石斧製作時の剝片であるかもしれないが、この周辺は木製品の補修や製作とは関連性の薄い空間であった可能性があり、他の石器も木材加工に直接関係しないと類推できるかもしれない。

(3)土器（第11~14図、表5） 実測図は一部を除き遺構内出土資料の次に包含層出土資料を掲載した。30・31は土製品であるが土器片を転用したものであるため、この項目内で扱っている。掲載した実測図は150点と多数であるため、とくに注目すべき土器についてのみ詳細を記述する。1~25はSX1から出土した土器である。一部、一覧表にはSX1外としているものもあるが、埋積土の状態からするとSX1に含めて考えても良いような資料である。

1~8は壺形土器（以下「形土器」は省略）であろう。1は外面が赤彩され、肩部は摩滅により不明な点が多い。2は西方の貝田町式土器で、口縁部にハケ状工具によるキザミが巡り、肩部には縱・横位の櫛描文が施文されている。色調は明黄褐色で、胎土には丸みのある黒色チャート岩片が多く含まれており、古生層の多い地域からの搬入の可能性も指摘されている（伊藤先生教示）。東三河南部では「よく円磨されたチャート」が、尾張平野では「チャートや砂岩などの堆積岩類と安山岩質の火山岩およびそれに由来する斜方輝石の組み合わせが特徴」とされる（永草1994）。3は口縁部に櫛描波状文が施文され、浮文と稜部はキザミで施文されている。胎土には石英などが多く含まれており非在地的胎土である。

9~21が深鉢である。9は口唇部がキザミで、沈線により施文されている。胎土には黒雲母が多量に含まれており、中部高地系の土器であろうか。11は多段の横位羽状条痕で、12と同一個体である。胴下部はハケ状工具による整形で、横位の条痕が巡っている。摩消線文（127）と共に深鉢の帶状の施文は駿河地方の特徴的な文様であり、中期の前半段階のメルクマールとされている。14は斜位の条痕の上に縱位の条痕を施文している。これは、愛知県朝日遺跡（石黒1994）などの西方の土器にも認められ、清水市下野遺跡（新井1985）などにも類例が存在している。ちなみに下野遺跡からは貝田町式の壺や栗林式の深鉢なども出土している。16・17の口唇部は指頭による内外押圧である。

22~25は底部で、網代痕が観察される。

26・27はSF1から出土した。26は広口の壺、27は多段の横位の羽状条痕文が施された深鉢である。

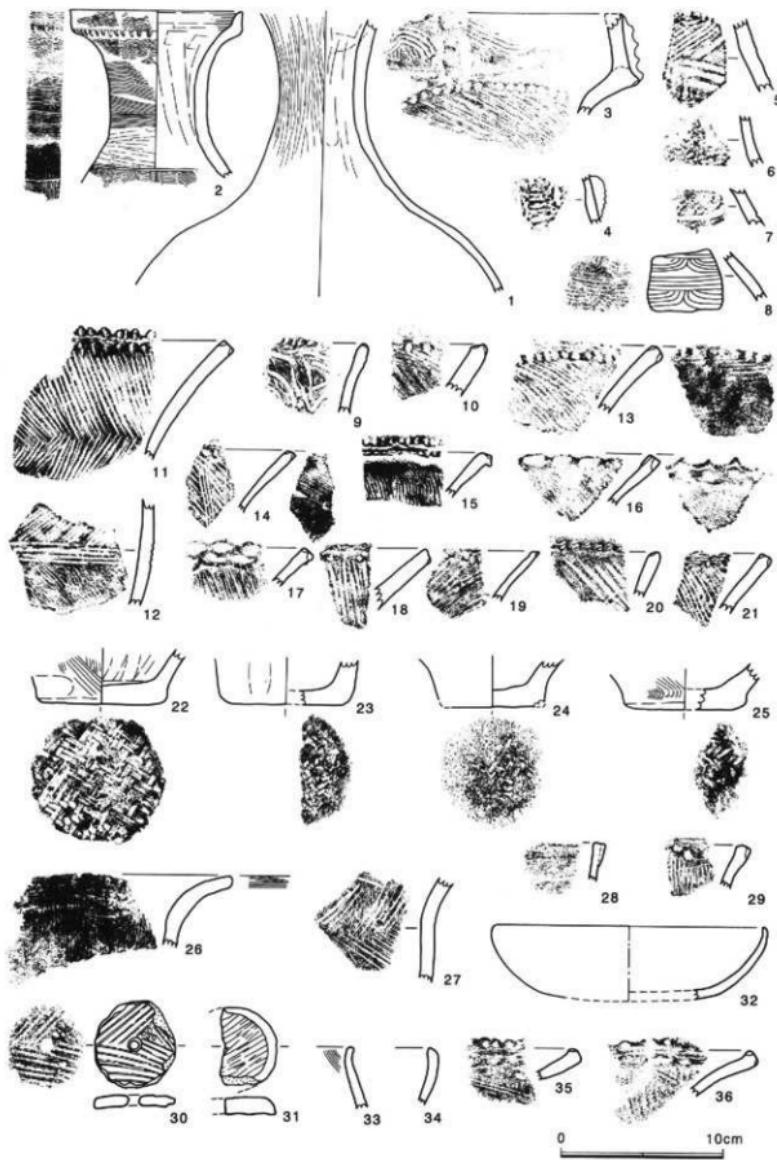
119はSD1、28はSD2出土で、29はSP6出土土器である。

以上が遺構内出土土器で、以下が包含層出土土器である。

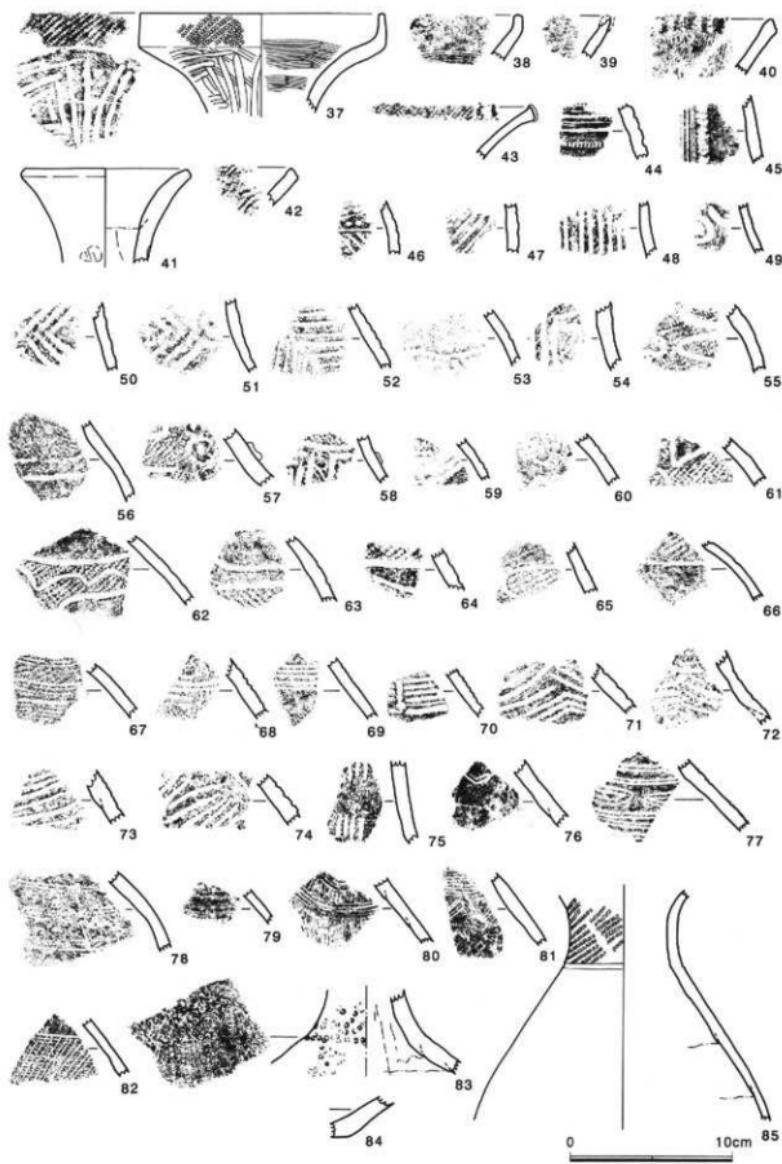
30・31は加工円盤である。30を紡錘車とすると、31は中央部の穿孔が無く、紡錘車の未製品とするとも可能であるが、同時期の穿孔の無い加工円盤は多数発見されており、用途は不明な点が多い。推測ではあるが、1のような細頸の壺が多数存在する時期に加工円盤が多い傾向にあり、蓋として転用されている可能性はないであろうか。

32は2層から出土した土師器の壺である。口径は推定で16.4cmと大きいが、破片資料であり正確な数値ではない。曖昧な点はあるが、口径から判断すると6世紀代に属するものと考えられる。

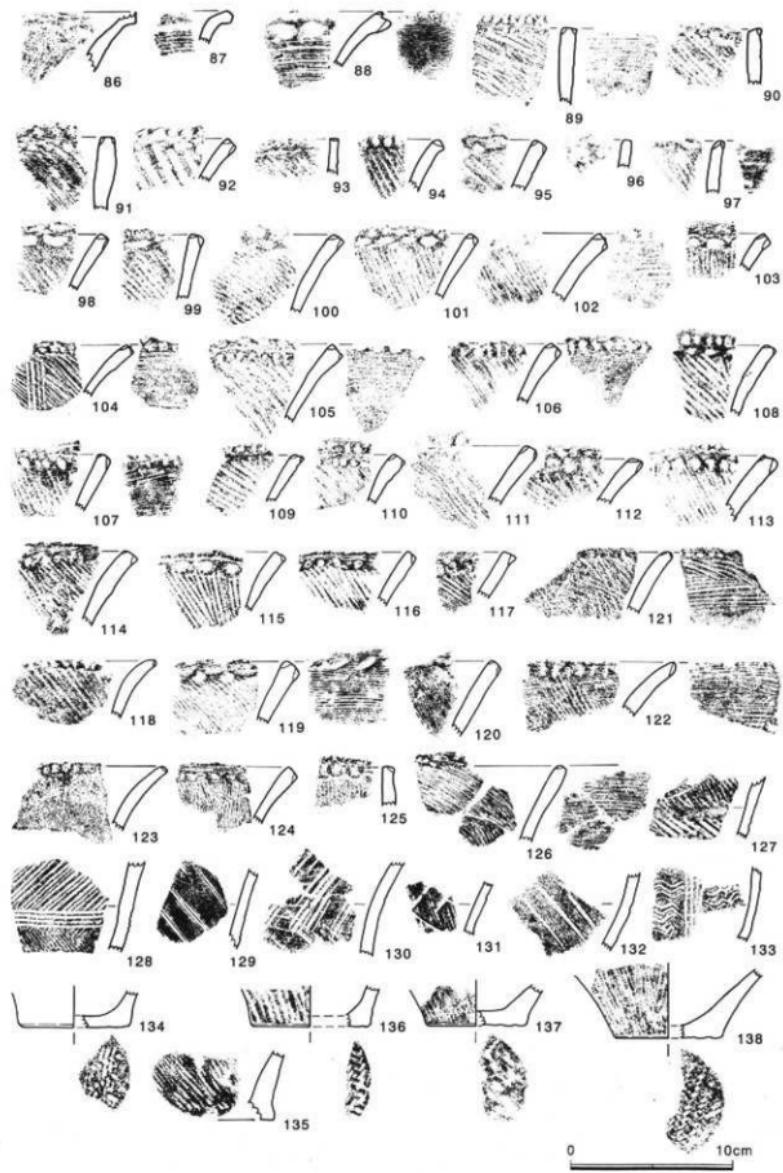
37~85は壺であろう。38・39は貝田町式であり、39は小型で浮文が付いている。44・45は竹管による押引き文や爪形文が施文されており、阿島式との区別がつかないが遠江地方の嶺田式であろう。41の刺突文も嶺田式の影響であろう。46~52は方形もしくは菱形や円形の文様がやや太い沈線により多重に描かれている。これらの胎土には黒雲母が含まれているものが多く、非在地的である。53~66は繩文が施文されたもので、沈線により区画しているものも多い。71~73はヘラ描きの連弧文で中部高地の栗林式との類似点が指摘されている。76・77は半截竹管状工具による施文であり、78~81には櫛描文が施文さ



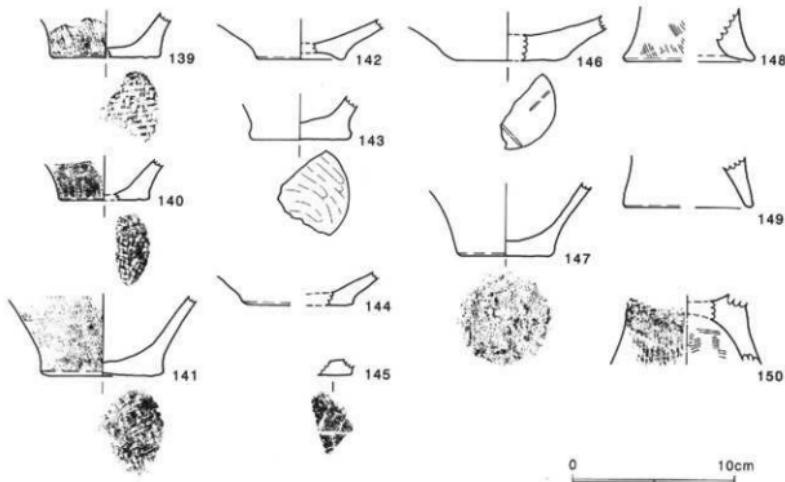
第11図 土器実測・拓影図(1)



第12図 土器実測・拓影図(2)



第13図 土器実測・拓影図(3)



第14図 土器実測・拓影図(4)

れている。83は竹管端部の刺突による。なお、83には爪先の痕跡が残っている。85は以前に有東式土器とされていたもので、中期後半に属するものであろう。

86～133が深鉢である。これらの土器の特徴としては、口唇部を内外面キザミ、条痕整形により仕上げているものが多いことである。条痕には幅の広い、比較的古相の例が多い。

86・93・95・131・132はヘラ状の工具による施文で、86は口唇の一部が肥厚している。

87・88の外面は横位の条痕で、87はかなり口唇部が外反し、88は肥厚している。

127・128には横位の帶状文が認められる。133は栗林式で、黒雲母が多量に含まれており、文様構成から見ても搬入品の可能性がある。山梨県油田遺跡では所謂有東式と栗林式土器が出土しているとされており（保坂2002）、静岡市川合遺跡では栗林式の壺や深鉢が出土しており（山田1996）、人の移動を伴う交流があったものと考えられる。

134～147は底部である。網代痕が存在するものが多いが、145～147のように木葉痕の付いている例も少數存在している。146は弥生時代後期に属するであろう。144は赤彩されている。

148～150は臺もしくは深鉢の台部である。148・149は小型であり、中期の可能性が高いが、150は後期に属するものと思われる。

これらの土器については、ほとんどのものが弥生時代中期の所産であり、中部高地や太平洋岸の尾張から南関東地方などに展開している土器の影響が強く認められ、製品や素地土が搬入されているものも予想以上に多いと考えられる。これは、広域にまたがる初期の大規模な農耕集落のネットワークが存在し、各地域間の情報交流が非常に活発であったためと考えられる。

表5 土器一覽

「標準十色範例」上卷

番号	学年 学級 学年	記號 番号	川上標高 (cm)	牧生 No.	取上H cm	器種 部位	鑑定 色調	備考
20	6	SX 1	143	891	19	020315 先生土器 深鉢	10YR 6 / 2 灰黃褐色	外輪：木本条板（3年）、丁字部堅實、内面：ナメ、朱キザミ、微細白色、透明石灰質、并在地 的粘土上。
21	6	SX 1	82	—	—	020424 先生土器 深鉢	7.5YR 5 / 4 灰黃褐色	外圍：木本（5年）：付添条板取り、指押正、内面：ナメ、指押正、微細透明石灰質、并在地 的粘土上。無斑褐色粒子△
22	6	SX 1/6	147	885	23	020515 先生土器 浅鉢	7.5YR 5 / 2 灰褐色	外側：ナメ（6年）：付添飞鳥、墨跡、内面：ナメテ、白砂粒子△、微細白色、透明石灰質○
23	6	SX 1	85	881	3	020424 先生土器 浅鉢	7.5YR 5 / 3 灰黃褐色	外側：ナメ、付添灰、内面：ナメ、付添、透明石灰質△、無斑褐色△、并在地的粘土 上。
24	—	SX 1/6	148	887	24	020515 先生土器 浅鉢	7.5YR 5 / 2 灰褐色	外圍：ナメ、黒色、角張った人骨片灰褐色△、微細透明石灰質、微細黑 色チャート△、并在地的粘土上。
25	—	SX 1	144	886	20	020515 先生土器 浅鉢	5YR 5 / 6 明赤褐色	外側：ナメ（5年）、耐飛灰、黑、白色、透明石灰質、并在地的粘土上。
26	8	SF 1	154	888	—	020521 先生土器 深鉢	7.5YR 7 / 4 灰黃褐色	外面：ナメ（6年）、付添漆取り、内面：横ハダメ、麻縫、力強った人骨片灰褐色△、微細 黑色化△△、并在地的粘土上。
27	8	SF 1	155	867	1	020512 先生土器 深鉢	10YR 7 / 2 灰黃褐色	外側：ナメ（4年）、付添灰、内面：横位ナメ△、直管状ナメ△、微細黑色化△△、 并在地的粘土上。
28	8	SP 2	129	885	2	020514 先生土器 深鉢	7.5YR 7 / 4 灰黃褐色	外側：ナメ（5年）、口唇部面取り、内面：ナメ△、無斑褐色、新鮮な口輪、透明石灰質○、 七瓣片開口、外向：系須（3年）、斜尖、内面：ナメ、無斑褐色、肉茎いた白色、透明石灰質○、 并在地的粘土上。加工工具痕（馬鹿車？）
29	8	SP 6	131	—	—	020514 先生土器 深鉢	10YR 6 / 2 灰黃褐色	外側：ナメ、口唇部面取り、外向：系須（3年）、斜尖、内面：ナメ、無斑褐色、肉茎いた白色、 透明石灰質○、并在地的粘土上。加工工具痕（馬鹿車？）
30	8	—	21	891	8	020422 土器品	10YR 6 / 2 灰黃褐色	土器小要項、外向：ナメ△（4本）、微細白色、透明石灰質、并在地的粘土上、加工工具痕
31	8	—	75	5層下部	—	020423 土器品	10YR 6 / 3 灰黃褐色	表面磨平、11段目以下、口輪、新鮮な口輪
32	8	—	1	2回	—	020416 土器品 折	2.5YR 6 / 6 橙色	外側：無斑褐色、微細白色、透明石灰質○
33	8	—	71	5層下部	—	020422 先生土器 碗	2.5YR 6 / 6 橙色	口唇部削減、外向：系須、形態特異△、無斑褐色○、後期？
34	8	—	71	5層下部	—	020422 先生土器 碗	10YR 7 / 3 灰黃褐色	口唇部削減△、外向：ナメ△（5本）、口唇塗灰、微細白色、透明石灰質○
35	8	—	169	884	37	020509 先生土器 口輪	10YR 7 / 3 灰黃褐色	口唇部削減△、外向：ナメ△（4本）、口唇塗灰、微細白色、透明石灰質○、棕色底子△、 並在地的粘土上。
36	8	—	119	893	67	020509 先生土器 口輪	10YR 7 / 3 灰黃褐色	外側：口唇部削減△、無斑褐色△△、透明石灰質○、並在地的粘土上。
37	8	—	137	891	68	020515 先生土器 盆	10YR 7 / 2 灰黃褐色	外側：口唇部削減△、無斑褐色△△、透明石灰質○、並在地的粘土上。
38	8	—	4	3回	—	020418 先生土器 盆	10YR 7 / 2 灰黃褐色	外側：口唇部削減△、無斑褐色△△、透明石灰質○、並在地的粘土上。
39	8	—	71	5層下部	—	020422 先生土器 盆	10YR 7 / 2 灰黃褐色	外側：口唇部削減△、無斑褐色△△、透明石灰質○、並在地的粘土上。
40	8	—	111	897	59	020509 先生土器 盆	10YR 7 / 3 灰黃褐色	外側：ナメ（5年）、ハケキザミ△、無斑褐色△、微細透明石灰質、白色石灰質○
41	8	—	38	891	25	020422 先生土器 盆	5YR 5 / 6 明赤褐色	外側：指押灰、外向：系須△（3本）、鹽田式△、并在地的粘土 上。
42	8	—	5	4回	—	020418 先生土器 盆	10YR 6 / 4 灰黃褐色	外側：口邊、哥窓文、手彌△、無斑褐色△△、并在地的粘土 上。
43	8	—	114	885	62	020509 先生土器 盆	7.5YR 7 / 4 灰黃褐色	外側：口唇部削減△、無斑褐色、透明石灰質○、并在地的粘土 上。
44	8	—	67	5層下部	—	020422 先生土器 盆	10YR 6 / 2 灰黃褐色	外側：口輪削減△、竹管押し引き△、水彩、深、微細白色、透明石灰質△、微細黑色化△△、油田式△、井 在地的粘土上。

番号	当社 固版	遺傳 遺傳	法古 法古	出土標高 取引 新号	出土標高 取引 新号	出土日 新号	種別 新号	留置 前號	色調
45	8	-	20	888	7	020422 新土器	陶	10YR 6 / 3 に、よい黄褐色	外側：黒地に青葉模様で引き、輪縁白色・透明行英△、輪山式、并在地の施土。
46	8	-	11	5層上部	-	020419 新土器	陶	10YR 6 / 2 灰褐色	外側：茶原・鶴突文、47と同一形状、輪縁黒留母△、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、并在地の施土。
47	8	-	6	4層	-	020419 新土器	陶	10YR 6 / 2 灰褐色	外側：46と同じ、一個体
48	8	-	58	888	45	020423 新土器	陶	10YR 6 / 1 灰白色	外側：茶原・輪縁文、白地・透明行英△、并在地の施土。
49	8	-	67	5層下部	-	020422 新土器	陶	10YR 6 / 3 に、よい黄褐色	外側：茶原・透かし文、輪縁透明行△、輪縁黒留母△、并在地の施土。
50	8	-	77	5層下部	-	020423 新土器	陶	10YR 6 / 3 に、よい黄褐色	外側：茶原・透かし文、輪縁黒留母△、輪縁透明行△、輪山式△、并在地の施土。
51	8	-	77	5層下部	-	020423 新土器	陶	10YR 6 / 2 灰褐色	50と同じ
52	8	-	5	4層	-	020418 新土器	陶	10YR 6 / 2 灰褐色	外側：茶原・透かし文、輪縁白色・透明行英△、并在地の施土。
53	8	-	77	5層下部	-	020423 新土器	陶	10YR 6 / 2 灰褐色	外側：茶原・透かし文、白地・透明行英△、并在地の施土。
54	9	-	5	4層	-	020418 新土器	陶	7.5YR 4 / 3 褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁黒留母△、輪縁透明行△、輪山式△、井名地の施土。
55	9	-	5	4層	-	020418 新土器	陶	7.5YR 4 / 3 褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁黒留母△、輪縁透明行△、輪山式△、井名地の施土。
56	9	-	77	5層下部	-	020423 新土器	陶	10YR 6 / 3 に、よい黄褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
57	9	-	48	883	35	020423 新土器	陶	7.5YR 5 / 2 灰褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
58	9	-	11	5層上部	-	020419 新土器	陶	7.5YR 5 / 2 灰褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
59	9	-	79	888	46	020423 新土器	陶	7.5YR 5 / 3 に、よい黄褐色	外側：透かし文、並区網目・輪縁透明行△、輪山式△、井名地の施土。
60	9	-	67	5層下部	-	020422 新土器	陶	10YR 6 / 3 に、よい黄褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
61	9	-	77	5層下部	-	020423 新土器	陶	7.5YR 6 / 4 に、よい黄褐色	外側：透かし文、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
62	9	-	15	900	2	020422 新土器	陶	10YR 7 / 2 灰褐色	外側：輪文・透かし文、白地・輪縁黒留母△、輪縁白色・透明行英△、井名地の施土。
63	9	-	63	880	50	020524 新土器	陶	7.5YR 5 / 4 に、よい黄褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁黒留母△、輪縁白色・透明行英△、井名地の施土。
64	9	-	70	5層下部	-	020422 新土器	陶	7.5YR 7 / 3 に、よい黄褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁黒留母△、輪縁白色・透明行英△、井名地の施土。
65	9	-	79	888	-	020423 新土器	陶	10YR 5 / 3 に、よい黄褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
66	9	-	20	889	17	020422 新土器	陶	7.5YR 6 / 4 に、よい黄褐色	外側：透かし文、輪縁白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
67	9	-	67	5層下部	-	020422 新土器	陶	7.5YR 7 / 2 灰褐色	外側：輪文・透かし文、白地・輪縁黒留母△、輪縁白色・透明行英△、井名地の施土。
68	9	-	134	880	50	020524 新土器	陶	7.5YR 5 / 3 に、よい黄褐色	外側：輪文・透かし文、輪縁黒留母△、輪縁白色・透明行英△、井名地の施土。
69	9	-	71	5層下部	-	020422 新土器	陶	7.5YR 5 / 4 に、よい黄褐色	外側：透かし文、輪縁黒留母△、輪縁白色・透明行英△、井名地の施土。
70	9	-	77	5層下部	-	020423 新土器	陶	10YR 7 / 3 に、よい黄褐色	外側：透かし文、輪縊白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
71	9	-	5	4層	-	020418 新土器	陶	5 YR 6 / 6 褐色	外側：透かし文、輪縊白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
72	9	-	32	890	19	020422 新土器	陶	10YR 8 / 2 灰白色	外側：輪文・透かし文、輪縊白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
73	9	-	70	5層下部	-	020422 新土器	陶	10YR 7 / 2 灰褐色	外側：透かし文、輪縊黑色△、輪縊白色・透明行英△、井名地の施土。
74	9	-	71	5層下部	-	020422 新土器	陶	10YR 4 / 1 灰褐色	外側：透かし文、黒地・輪縊白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
75	9	-	121	5層下部	-	020509 新土器	陶	10YR 7 / 3 に、よい黄褐色	外側：透かし文、輪縊白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。
76	9	-	12	5層下部	-	020419 新土器	陶	10YR 7 / 3 に、よい黄褐色	外側：透かし文、輪縊白色・透明行英△、輪山式△、井名地の施土。

番号	写真 図版	岩種	標高 番号	出土場所 (cm)	出土日 No.	施別	性質 部位	色調
77	9	-	34	888	21	020422	弥生土器	10YR 6 / 2 灰青褐色
78	9	-	53	887	40	020423	弥生土器	5 YR 6 / 8 褐色
79	9	-	13	5層下部	-	020419	弥生土器	7.5YR 7 / 4 浅褐色
80	9	-	70	882	42	020423	弥生土器	7.5YR 7 / 4 にぶい褐色
81	9	-	55	892	42	020423	弥生土器	7.5YR 6 / 4 にぶい褐色
82	9	-	77	886	44	020423	弥生土器	10YR 2 / 1 褐色
83	9	-	116	5層下部	64	020509	弥生土器	10YR 6 / 3 浅褐色
84	9	-	68	5層下部	-	020422	弥生土器	2.5YR 4 / 8 赤褐色
85	-	-	1	865~898	30	020423	弥生土器	10YR 7 / 3 にぶい褐色
86	10・11	-	71	5層下部	-	020422	弥生土器	10YR 7 / 2 にぶい褐色
87	10・11	-	3	-	-	020418	弥生土器	10YR 7 / 4 にぶい褐色
88	10・11	-	25	884	12	020422	弥生土器	10YR 5 / 3 にぶい褐色
89	10・11	-	105	5層	-	020507	弥生土器	10YR 5 / 1 褐灰色
90	10・11	-	60	886	47	020423	弥生土器	10YR 6 / 4 にぶい褐色
91	10・11	-	13	5層下部	-	020419	弥生土器	10YR 4 / 2 灰青褐色
92	10・11	-	74	5層下部	-	020423	弥生土器	10YR 6 / 2 灰青褐色
93	10・11	-	7	4層	-	020419	弥生土器	10YR 6 / 3 にぶい褐色
94	10・11	-	70	5層下部	-	020422	弥生土器	7.5YR 6 / 3 にぶい褐色
95	10・11	-	2	-	-	020418	弥生土器	10YR 7 / 3 にぶい褐色
96	10・11	-	9	5層上部	-	020419	弥生土器	10YR 6 / 2 灰青褐色
97	10・11	-	71	5層下部	-	020422	弥生土器	7.5YR 5 / 2 灰褐色
98	10・11	-	67	5層下部	-	020422	弥生土器	7.5YR 5 / 4 にぶい褐色
99	10・11	-	4	3層	-	020418	弥生土器	10YR 6 / 3 にぶい褐色
100	10・11	-	112	898	60	020509	弥生土器	10YR 5 / 2 灰青褐色
101	10・11	-	70	5層下部	-	020422	弥生土器	7.5YR 6 / 3 にぶい褐色
102	10・11	-	70	5層下部	-	020422	弥生土器	7.5YR 5 / 4 にぶい褐色

番号	年 代	層 級	遺 構	性 質	出土點 名	出土點 高 (cm)	版上 高 N. o.	標 示	標 示	色 調		備 考
										外 部	内 部	
103	10・11	-	150	5層下部	-	020315	灰土層	深鉢	10YR 5 / 3	にぶい黃褐色	外觀：条紋（4本）、指觸面平、僅、微圓透明石灰質○、無石△、在它的斷土	
104	10・11	-	70	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 2	灰褐色	外觀：条紋（1本）、口唇表面取り、条キサミ、深、内側：条紋（4本）、条キサミ、微圓白色、透明石灰質○、断土鉢
105	10・11	-	70	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 3	にぶい褐色	外觀：条紋（4本）、口唇表面取り、条キサミ、深、内側：ハグメ（5本）、ハケキサミ、微細白色、透明石灰質○、断土鉢
106	10・11	-	72	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 3	にぶい褐色	外觀：条紋（4本）、ハケキサミ、深、内側：ハグメ（7本）、ハケキサミ、微細白色、透明石灰質○、断土鉢
107	10・11	-	13	5層下部	-	020419	灰土層	深鉢	10YR	6 / 3	にぶい黃褐色	外觀：条紋（4本）、口唇表面取り、ハケキサミ、内側：条紋（4本）、条キサミ、微細白色、透明石灰質○、断土鉢
108	10・11	-	866	55	020509	灰土層	深鉢	10YR	6 / 3	にぶい黃褐色	外觀：条紋（4本）、条キサミ、内側：条紋、条キサミ、微細白色○、透明石灰質○	
109	10・11	-	11	5層下部	-	020419	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 2	にぶい褐色	外觀：条紋（4本）、内外面均サミ、微細白色、透明石灰質○、胎、指觸板
110	10・11	-	76	5層下部	-	020423	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 3	にぶい褐色	外觀：条紋（4本）、口唇表面取り、条キサミ、内側：条紋、条キサミ、微細黑色○、微細黑色○、胎
111	10・11	-	71	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 2	灰褐色	外觀：条紋（3本）、口唇面取り、内外面均サミ、微細白色○、透明石灰質○
112	10・11	-	11	5層上部	-	020419	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 3	にぶい褐色	外觀：条紋（3本）、口唇面取り、内外面均サミ、微細白色○、透明石灰質○
113	10・11	-	75	5層下部	-	020423	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 2	灰褐色	外觀：条紋（4本）、口唇表面取り、條、内側：条紋、条キサミ、微細白色○、透明石灰質○
114	10・11	-	76	5層下部	-	020423	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 3	にぶい褐色	外觀：条紋（4本）、口唇表面取り、ハケキサミ、條、内側：条紋、条キサミ、微細黑色○、微細黑色○、胎
115	10・11	-	78	5層下部	-	020423	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 3	にぶい褐色	外觀：条紋（4本）、口唇面取り、胎頭狀、微細白色△、半在地的胎上
116	10・11	-	156	5層下部	-	020615	灰土層	深鉢	2.5YR	/ 4	にぶい褐色	外觀：条紋（1本）、口唇面取り、条キサミ、深、内側：ナメ、微細白色、透明石灰質○、無石△、微細黑色△了○
117	10・11	-	70	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	10YR	6 / 3	にぶい黃褐色	外觀：条紋（4本）、口唇表面取り、ハケキサミ、微細白色○、透明石灰質○、胎土圓輪
118	10・11	-	50	880	37	020423	灰土層	深鉢	10YR	7 / 4	にぶい黃褐色	外觀：条紋（4本）、口唇面取り、微細白色○、透明石灰質○、胎圓輪△
119	10・11	SD 1	80	..	-	020424	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 4	にぶい褐色	外觀：ハグメ？（5本）、口唇表面取り、條、内側：ハグメ（7本）、微細黑色△了○、半在地的胎土
120	10・11	-	71	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	10YR	7 / 3	にぶい黃褐色	外觀：ハグメ（7本）、指觸面、口唇面取り、外新鮮、微細白色、透明石灰質○、胎行△
121	10・11	-	37	890	24	020422	灰土層	深鉢	SYR	/ 4	にぶい黃褐色	外觀：条紋（1本）、条キサミ、微細白色、透明石灰質○、無石△
122	10・11	-	67	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 4	にぶい褐色	外觀：ハグメ（5本）、内外面均サミ、微細白色、透明石灰質○、胎行△
123	10・11	-	68	5層下部	-	020422	灰土層	深鉢	7.5YR	/ 6	褐色	外觀：ハグメ（9本）、キサミ、外玉輪、微細白色、透明石灰質○、無石△、胎圓輪

番号	写真 図版	遺構 付記	出土標高 (cm)	東北 上	東北 取上	部位	種別	色調		参考
								外観	内面	
124	10・11	—	58	888	45	020423	学生土器	深鉢	10YR 6 / 2 深青褐色	外観：ハケメ（7本）、口科ハケ取り、条キサジ、底、内面：ナガ、深緑褐色、透明石英○、 紫鐵鉄片△
125	10・11	—	70	5層下部	—	020422	学生土器	深鉢	5YR 6 / 4 にぶい褐色	外観：ハケメ（5本）、口唇ハケ取り、条キサジ、深緑褐色、透明石英○、紫鐵鉄片○
126	10・11	—	2	—	—	020418	学生土器	深鉢	7・5YR 6 / 3 にぶい褐色	外観：ハケメ（5本）、深褐色、条キサジ、深緑褐色、透明石英○、紫鐵鉄片○、 花地の施毛
127	10・11	—	122	5層下部	—	020409	学生土器	深鉢	7・5YR 6 / 3 K-31褐色	外観：ハケメ（3本）、指因縫線文、保、内面：ハケメ（7本）、深褐色、透明石英○、 花地の施毛
128	10・11	—	68	5層下部	—	020422	学生土器	深鉢	10YR 5 / 3 にぶい褐色	外観：花地模様、施毛文（4本）、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛
129	10・11	—	71	5層下部	—	020422	学生土器	深鉢	10YR 5 / 3 にぶい褐色	外観：花地模様文？、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛
130	10・11	—	13	5層下部	—	020419	学生土器	深鉢	10YR 5 / 3 にぶい褐色	外観：花地模様文（3本）、深褐色、透明石英○
131	10・11	—	67	5層下部	—	020422	学生土器	深鉢	10YR 6 / 3 にぶい褐色	外観：花紋（15本）→斜交文、保、深褐色、透明石英○、微細褐色纹△
132	10・11	—	57	890	44	020423	学生土器	深鉢	10YR 7 / 2 にぶい褐色	外観：斜交文？、保、深褐色、透明石英○、舞石△、非花地の施毛
133	10・11	—	122	5層下部	—	020509	学生土器	深鉢	5YR 6 / 4 にぶい褐色	外観：花地模様状（斜交文、保、黒雲母）、深褐色、透明石英○、舞石△、非花地の施毛、梨狀式 花地の施毛
134	12	—	68	5層下部	—	020422	学生土器	底	5YR 5 / 4 にぶい褐色	外観：斜交文、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛：
135	12	—	97	5層下部	—	020424	学生土器	底	5YR 5 / 4 にぶい褐色	外観：花紋（4本）、深褐色、透明石英○、斜交地の施毛上
136	12	—	3	—	—	020418	学生土器	底	7・5YR 6 / 4 にぶい褐色	外観：斜交文（5本）、深褐色、透明石英○
137	12	—	26	884	13	020422	学生土器	底	7・5YR 5 / 4 にぶい褐色	外観：斜交文、保、深褐色、透明石英○、白色丸子△、舞石△、非花地の施毛 花地の施毛
138	12	—	33	887	29	020422	学生土器	底	7・5YR 5 / 4 にぶい褐色	外観：斜交文、保、深褐色、透明石英○、舞石△、非 花地の施毛
139	12	—	105	5層	—	020507	学生土器	底	10YR 6 / 3 にぶい褐色	外観：斜交文、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛
140	12	—	79	5層下部	—	020423	学生土器	底	10YR 4 / 3 にぶい褐色	外観：斜交文、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛
141	12	—	32	884	39	020423	学生土器	底	7・5YR 5 / 3 にぶい褐色	外観：斜交文、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛
142	12	—	2	—	—	020418	学生土器	底	7・5YR 7 / 4 にぶい褐色	外観：ヒミガキ、回接、深褐色、透明石英○、花地の施毛
143	12	—	5	4層	—	020418	学生土器	底	10YR 7 / 2 にぶい褐色	外観：ヒミガキ、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛
144	12	—	70	5層下部	—	020422	学生土器	底	10YR 6 / 3 にぶい褐色	外観：ヒミガキ、保、深褐色、透明石英○、花地の施毛
145	12	—	6	4層	—	020419	学生土器	底	7・5YR 7 / 4 にぶい褐色	外観：水滴形、底、深褐色、透明石英○、花地の施毛
146	12	—	12	5層上部	—	020419	学生土器	底	10YR 7 / 3 にぶい褐色	外観：水滴形、深褐色、透明石英○、花地の施毛○、後期
147	12	—	62	891	49	020424	学生土器	底	10YR 8 / 2 灰白色	外観：水滴形、内外面墨化、深褐色、透明石英○、舞石△
148	12	—	75	5層下部	—	020423	学生土器	台	10YR 8 / 3 にぶい褐色	外観：ヒミガキ、ヘチナ、深褐色、透明石英○、花地の施毛
149	12	—	76	5層下部	—	020423	学生土器	台	10YR 8 / 3 にぶい褐色	外観：灰地、深褐色、透明石英○、舞石△
150	12	—	67	5層下部	—	020422	学生土器	台	10YR 6 / 3 にぶい褐色	外観：ヒミガキ（5本）、深褐色、透明石英○、舞石△、白色丸子△

*断面上の測定記は、◎多量、△少量を示している。「微細」とあるものは隔壁ではなく見事な1cm幅に観察される凹面の本数である。
*標識文・系譜文・系譜表・ハケメなどのカタゴリ内の數値は1cm幅に観察された明らかなる複合のみ記入している。

第IV章 まとめ

第1節 弥生時代の有東集落について

(1)集落立地と環境変動 駿河地方における水稲農耕の開始期の問題は不明な点が多い。従来の弥生時代中期初頭の丘陵部での石器を伴う集落から中期中葉の沖積窪地上への集落立地の変化という図式では、より複合的な弥生時代社会の構造を理解することはできないであろう。ただし、前期段階の資料が限定される現状では推測でしかないが、この時期の平野部が無人に近いような状態を想定する方が無理があるのではないかと考えられる。小海退による遺跡の地下深くへの埋没を想定している研究者は多いが、前期の集落が発見されていない理由付けは当然必要であろう。

遠江地方では、浜松市宮竹野跡遺跡から櫻王式土器が出土した水田跡が発見され（太田1994）注目されたが、その後の調査により水田跡は中期以降の可能性が高いとされた（佐藤1997）。突帯文土器や遠賀川式土器の低地遺跡での出土はキャンプサイト的な性格付けがなされているが、ベースキャンプの様相も不明な現状では集落の類型化に対する基本的な証拠が不足している。

県内の低地の弥生時代の遺跡を調査すると必ずと言って良いほど、微量の条痕文土器が発見される。これらは破片資料であり、時期の認定が難しいため、ほとんどの場合は報告書にも掲載されることが少ない。関東地方の縄文時代晚期から弥生時代前期の建物跡は掘り込みが浅く、その認定が難しいか所謂掘立柱建物のみで構成されているため時期が確定できないことが指摘されている（及川良2002）。これらはキャンプサイトだけでなく、通常の定住集落でもそうした傾向にあることも指摘されている。一昨年調査された長泉町大平遺跡では前期相当の堅穴住居跡が発見されたが、掘り込みは浅く、主柱穴も不明瞭である（水上2001）。時期は下るが掛川市原川遺跡の集落は掘立柱建物跡のみで構成されている。

気候の寒冷化に伴う環境変動は河川の氾濫による遺跡の侵食と埋没、残存湖の埋没、砂堤の形成など様々な地理的環境の変化を引き起こすものと予想される。しかし、静清平野での弥生時代の遺跡では、遺物包含層の下部にカワゴ平縄石と大沢スコリヤが確認される場合が多く、現状では、海退に伴う地形の改変により遺跡が発見されないとするにはやや難がある。当該期のほとんどの遺跡を覆い隠してしまうほどの規模の大きな環境の変化を指摘するだけの材料に欠けている。

筆者自身は気候の変動が当時の人々にとって大きな影響を及ぼしていたと考えているが、問題はその影響の及んだ範囲と程度の差であり、それらに対処する技術と社会的な適応の度合いである。

有東遺跡の集落変遷は弥生時代中期の集落域の多くが、後期段階には水田域へと変化していることから、「弥生時代中期の小海退が終末をとげ新たな海進の始まりと共に遺跡の東側に広がる低地の拡大が始まり、この地域でも集落の居住環境の悪化が激しく集落の移転が必要になってきた」（平野1983）とする後期の小海進の影響を推測しているものがある。これに対して、後期の登呂遺跡が有東遺跡より1.5m以上低いことから海進の影響を想定しにくい（中野1988）とする考えもある。

有東遺跡の遺構の変遷を分析した伊藤氏によると「弥生中期から後期への集落構成の変化はかなり大きく、平面的に見れば居住域・墓域とその周辺地の水田域という集落構成が逆転している」（伊藤2002）とされている。これは、後期段階の杭打大区画畝畔による大規模な水田域の造成といった土木技術の向上と複数の集落群での共同の開発と利用が予想されている（伊藤前掲書）。集落間による水田の共同経営については、未だに推論の域を脱していないが、広大な面積の水田域も発掘されており（及川司1996）、水利権を含めた共同の管理体制は存在していたと思われるが、耕地は各経営単位によって分割経営されていたものと思われる（近藤1959）。ただし、有東集落が水田化されるのは別の個別的、直接的要因を

考慮すべきかもしれない。地震などによる地盤の変動も考慮する必要性もあるよう、有東遺跡の東側の河川が閉塞状態になり、部分的に湿地化していることは確かなようである。

(2)集落構造 今年の2月に開催されたシンポジウム「静岡県における弥生時代後期集落の変遷」では、有東遺跡に関する過去の調査成果が分かりやすくまとめられている(菊田2002他)。それによると弥生時代中期の有東遺跡は南側と北側に方形周溝墓群が存在し、その間の350mほどの範囲の中(東西はより広い範囲の集落域が想定されている)に集落が形成されている。無論、全てが同時期のものではないが、非常に大きな集落であったことは確かである。ただし、この時期の建物跡として報告されているものは3棟程度であり、異常に検出例が少ない。

弥生時代後期前半段階までは、中期の集落域に近い範囲で建物跡が確認されている。竪穴住居跡もしくは平地住居跡と考えられる例が4軒存在する。以後、居住域は水田化され、規模を縮小しているようである。

県内の弥生時代の集落では、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の構成比は掘立柱建物跡が10~20%程度が一般的な集落の様相であり、時期や集落間の階層差、構築する地盤の土質によりそれらの構成比の違いがある(松井2002)とされている。

かつて筆者自身は浅羽町古新田遺跡の弥生時代後期後半の集落分析において、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の構成比がほぼ同数であることを指摘した(拙著1993)。この遺跡の発掘調査は、丘陵上にも多くの掘立柱建物跡が存在することを同町北原遺跡の調査(柴田1987)で確信した担当者の柴田稔氏による影響が大きい。柴田氏は次の同町团子塚遺跡でも同様な集落の存在を明らかにしている(柴田1992)。掘立柱建物跡の柱穴は、掘った土を埋め戻しているため注意深いプラン確認が必要であり、遺物包含層が厚い場合や掘り込みの深い竪穴住居跡が密集する調査区では検出が困難となる。

古新田遺跡は丘陵の奥部に位置する小規模な集落跡である。この集落の近接する竪穴住居跡と掘立柱建物跡の建物跡群内での相対的規模の比はおよそ一致する。のことから掘立柱建物跡の用途を食料貯蔵用の倉庫と仮定すると、各世帯(各竪穴住居跡に居住する家族を基本とする)の動産に対する私的所有の概念がかなり進んでいることが指摘でき、血縁を主とする単位集団間の相対的自立性も高かったものと考えた。この単位集団の成長と世帯の自立化の動きが活発になり後の古墳時代中期の散在型の集落の形成要因のひとつになると当時は予測していた。

今回、有東遺跡と周辺の弥生時代の集落の動態を検討すると、巨視的に後期前半段階の集落分布を見ると、すでに中期の中核的集落が解体し散在的な集落配置となっており、各集落(単位集団)間の自立性がより早い段階で表出している可能性もある。これがこの地域の特徴として一般化できるのか、特殊な集落形態であるのかは、資料の増加を待って今後も検討していかたい。

第2節 有東遺跡出土の弥生時代中期土器について

今回出土した土器は細片のため不明な点が多いのであるが、従来言われていた有東式の範疇よりもやや古いものが多いのではないかと思われる。ここでは、静岡平野での弥生時代中期の土器編年を確認し、その時間軸上の位置付けを行い、系統的な問題についても検討を試みたい。

中期の土器は丸子式段階は未だに資料的な制約が大きいが、その他は量的にも充実しつつあり、それに対する分析が必要な時期である。

(1)段階の設定 駿河地方の土器編年は、他地域との併行関係を重視した編年案が最近提出されたので、その案を参考とする(佐藤・萩野谷2002)。ただし、佐藤・萩野谷編年は詳細に時期区分しているが、今

回は編年の細分を目的としたものではなく、型式変化の方向性の確認を主な目的としたい。そのため、静岡平野で比較的型式変化を理解しやすい一括性の高い土器群を段階的に並べて検討する。

有東遺跡出土で公表されている土器群のなかでは、第16次調査のSF05（第15図）が最古段階に位置付けられているので、これらの土器を原点とし以後の段階設定を行う。ここでは仮に、1段階：有東遺跡SF05（岡村1997）、2段階：川合遺跡2号方形周溝墓（山田1996）、3段階：有東遺跡SD02・03（天石1997）、4段階：瀬名遺跡13a層（中鉢1994）として記述する。

SF05は上層が水田によりパックされており、一括性は比較的高いとされている（岡村氏教示）。この土坑からは縄文を地文とし、太い沈線による重区画文や王字文（非在地的胎土）が施文された細頸壺、貝田町式や嶺田式の壺が出土している。深鉢には胸部中位に帶状の太い沈線文が施文されており、ハケメの縦走羽状文や条痕とハケメによる装飾的な整形痕が施されている。深鉢の条痕のなかには、一部羽状になるものがある。

2段階の川合遺跡例は、壺は白岩式の影響が顕著で、櫛描文が盛行し、縄文地の重厚な区画文は簡素化され、複雑な文様構成は減少する。栗林式の影響とされる重弧文も少量存在する。深鉢は羽状条痕文からの系譜と考えられるヘルもしくは棒状工具による羽状文とハケメによる調整が多い。低い台部も出土している。深鉢の形状に近い高壺も存在する。

3段階の有東遺跡SD02・03例には明らかな混入品も存在するが、大型の破片は比較的まとまった時期を示している。壺には細頸と太頸のものがあり、前段階の文様がより簡素化され、頸部や肩部に集中する傾向が強まる。深鉢は口縁部の屈曲が増し、低い台部が一定量出土する。調整はハケメにより仕上げられ、条痕は消滅する。口唇部のキザミは外面のみが主流となる。その他、口縁部が屈曲した鉢形の高壺も數点出土している。

4段階は瀬名遺跡の包含層出土資料であるが、中期から後期への過渡的な様相を示す資料とされている。壺は単純口縁で無花果形の胴部の細頸壺が主流となり、縄文や櫛描文は頸部に集中している。深鉢形は減少し、高い台部の付く壺（胴径が口径を上回る）が多く出土している。

(2)量の変化と系統問題 これらの変遷観を今回の出土土器と比較検討すると、SX1出土土器、重区画文を有する壺、太い条痕調整の深鉢などの多くが1段階に属し、比率的にもかなり多くの割合を占めている。

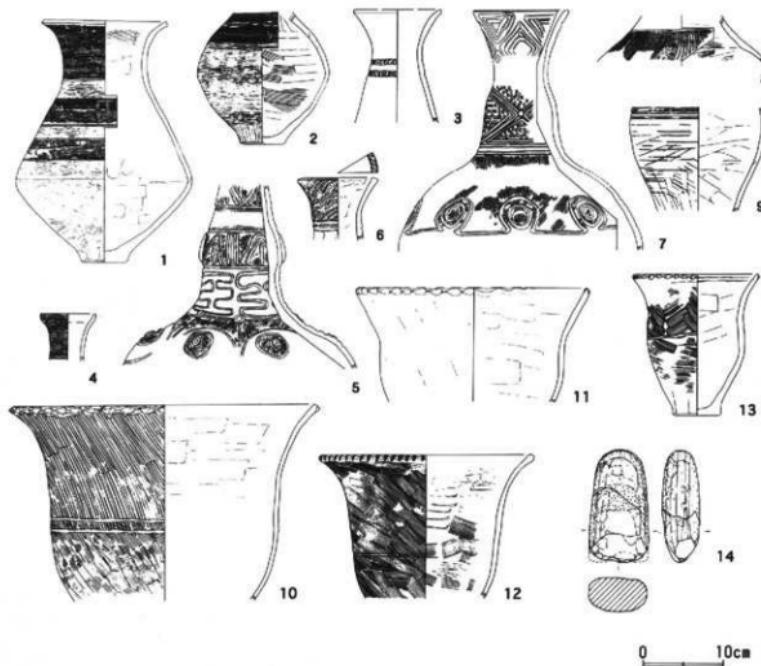
この段階の有東遺跡では、貝田町式、嶺田式、鶴ヶ池式などの遠隔地の土器の影響が認められる点は注目される。これらの土器は非在地的胎土のものが多く、製品の搬入が想定される。複数の地域との広域の交流は、「東日本一帯の社会変動」（石川2000）を示しているとの見解もある。土器の移動現象だけでは根拠は薄弱であるが、神奈川県中里遺跡（戸田2002）や埼玉県小敷田遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1991）例のように大規模な低地の開拓に伴う人的・物的ネットワークの形成を各地域集団が積極的に進めた結果と考えている。

2段階では、壺に櫛描文や連弧文が施文されているものが該当するが、破片資料であり3段階との区別ができないものも多い。深鉢は沈線による羽状文が施文されたものが相当するが、条痕は1段階との区別が難しい。栗林式や白岩式の影響が強い段階とされている。

3段階の低い台部や口縁部が外反したハケ整形深鉢や、從来有東式とされてきたような壺も量的にそれほど多くはない。

確実な4段階の資料は抽出できないし、量的には非常に少ないと考えられる。

4段階以降の資料が非常に少ないので、おそらく別の地点へと居住区が移ったためと考えられる。今回の調査区の南東部の第18次調査区と南西部の第5次調査区では、登呂式期の建物跡が確認されているようであり（菊田2002）、遅くとも後期後半段階には今回の調査地点周辺は水田化しているものと推測



第15図 有東遺跡16次出土遺物（岡村 1997「有東遺跡」 静岡市教育委員会より転載）

される。

以上、簡単ではあるが、今回の出土土器の概要をまとめてみたが、胎土の問題については深く追究することができなかった。筆者自身の見当外れかもしれないが、いずれ稿を改めて検討してみたい。

引用参考文献

- 静岡県 1930『静岡縣史』第1巻
- 加藤明秀・芦澤長介
1938「静岡市有東城廬馬捨場跡生式遺跡」『考古学』第9巻9号 東京考古學會
- 杉原莊介 1951「静岡縣安部郡原派遺跡」『日本考古學年報』1 日本考古學協會
- 杉原莊介 1951「静岡縣有東第一遺跡」『日本考古學年報』1 日本考古學協會
- 後藤守一 1951「静岡縣有東第二遺跡」『日本考古學年報』1 日本考古學協會
- 大塚初重 1968「東海地方II」『弥生土器集成』 東京堂出版
- 近藤義郎 1959「共同体と單位集団」『考古學研究』第6巻1号 考古學研究會
- 向坂鋼二・永房熙
1968「有東式土器」『遠江考古學研究』2 遠江考古學研究會
- 中西道行 1982「静岡市有東遺跡出土の弥生中期の土器」「クロッカス」第6号 クロッカス同人
- 中嶋慎夫 1981「御殿・二之宮遺跡発掘調査報告書」 箕面市教育委員会
- 平野吾郎他 1983「有東遺跡I」静岡縣文化財調査報告書第28集 静岡縣教育委員会
- 加藤芳朗 1983「有東遺跡をめぐる地形・地質的背景」「有東遺跡I」 静岡縣教育委員会
- 鈴木敏則他 1984「猿子遺跡発掘調査概要」 岐松市教育委員会
- 中野一省 1984「登呂遺跡第6次調査と両辺遺跡」「登呂遺跡発見40周年記念シンポジウム資料」
登呂遺跡シンポジウム実行委員会
- 松井一明 1985「植田式土器の検討―特に壺形土器について―」「転換」1
- 新井正樹 1985「下野遺跡」 清水市教育委員会
- 長谷川秀厚 1985「猿河西山遺跡」 静岡市教育委員会
- 小野昭 1986「石器の生產」『日本考古學3 生產と流通』 岩波書店
- 柴田稔 1987「北原遺跡」 浅羽町教育委員会
- 伊藤寿夫 1987「有東船形遺跡」 静岡市教育委員会
- 伊藤寿夫 1988「有東遺跡」『日本における縄作農耕の起源と展開・資料集一』
日本考古學協會静岡大會實行委員會・静岡縣考古學會
- 静岡市立登呂博物館
1988『特別展 静岡・清水の弥生時代・新出土品にみる農耕生活』
- 竹内直文 1988「東日本における弥生文化の發展—静岡縣の土器編年を中心として—」「史館」20
- 伊藤寿夫 1989「有東船形遺跡II」 静岡市教育委員会
- 松田訓 1990「名古屋城二ノ丸」 愛知縣埋蔵文化財センター
- 平野吾郎 1990「東海地方における水稲耕作の開始について」『静岡縣埋藏文化財調査研究所研究紀要』
『静岡縣埋藏文化財調査研究所』
- 伊藤寿夫 1991「静岡市有東遺跡における弥生時代集落の検討」「静岡市立登呂博物館報2 平成3年度』
静岡市立登呂博物館
- 静岡県埋藏文化財調査事業團
1991「小笠田遺跡」
- 伊藤律子・山山成洋
1992「川合遺跡 遺物編I」『静岡縣埋藏文化財調査研究所』
- 伊藤律子・山山成洋・平野吾郎
1992「川合遺跡 遺物編II」『静岡縣埋藏文化財調査研究所』
- 山田しょう・山田成洋
1992「静岡縣内出土の石包」の使用痕分析「川合遺跡 遺物編II」
『静岡縣埋藏文化財調査研究所』

- 伊藤道玄 1992「川合遺跡より出土した石器の材質」『川合遺跡 遺物編II』
静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田辺昭三 1992「弥生時代の重要遺物」『静岡県史 考古三』 静岡県
- 鈴木隆夫・椿原靖弘
1992「清水遺跡」 藤枝市教育委員会
- 柴田 稔 1992「岡子塚遺跡I」 浅羽町教育委員会
- 柴田 誠 1993「古新田遺跡における弥生時代の集落景観」『古新田II』 浅羽町教育委員会
- 八木広尚 1993「駿府城内遺跡」「ふちゅ～るNo.1 平成3年度静岡市文化財年報」
静岡市教育委員会
- 鈴木悦之 1993「有東遺跡（第10次調査）」「ふちゅ～るNo.1 平成3年度静岡市文化財年報」
静岡市教育委員会
- 永草旗次 1994「伊勢湾地域の土耕船土器の分析－弥生時代から古墳時代を中心として－」
『朝日遺跡V』 愛知県埋蔵文化財センター
- 佐藤由紀男 1994「中期弥生土器における朝日遺跡周辺と天竜川周辺以東との対応関係」
『朝日遺跡V』 愛知県埋蔵文化財センター
- 中野賢治 1994「櫛名遺跡出土の弥生式土器」「櫛名遺跡III」 駿静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 山口 敏 1994「櫛名遺跡出土の弥生時代人骨」「櫛名遺跡III」 駿静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 太田好治 1994「宮竹野遺跡」 浜松市文化協会
- 伊藤淳史 1996「太平洋沿岸における弥生文化の展開－駿河湾岸中期弥生土器からの検討－」
『YAY!』 弥生土器を語る会
- 八木広尚 1996「鷹ノ道遺跡」 静岡市教育委員会
- 及川 司 1996「曲金北遺跡（遺構編）」 駿静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 山田成洋 1996「川合遺跡 遺物編I」 駿静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大石豆実 1997「有東遺跡 第14次調査報告書」 静岡市教育委員会
- 岡村 渉 1997「有東遺跡 第16次調査報告書」 静岡市教育委員会
- 伊藤寿夫 1997「豊田遺跡（第6次調査）」「ふちゅ～るNo.5 平成7年度静岡市文化財年報」
静岡市教育委員会
- 佐藤山起男 1997「宮竹野遺跡4」 浜松市文化協会
- 中野 実 1988「笠置遺跡の再検討」「日本における稻作農耕の起源と展開」
日本考古学協会静岡大会実行委員会 静岡県考古学会
- 平野吉郎 1988「中部・東海地方における稻作農耕の開始と展開」「日本における稻作農耕の起源と展開」
日本考古学会静岡大会実行委員会 静岡県考古学会
- 石川日出志 2000「中里遺跡と東日本の弥生時代」「小田原市道路発表会」 小田原市教育委員会
- 小田哲也 2000「中里遺跡の調査」「小田原市道路発表会」 小田原市教育委員会
- 水上綾子 2001「大平遺跡II」 駿静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 及川良彦 2002「住居と掘立柱建物跡（関東）」「静岡県における弥生時代集落の変遷」
静岡県考古学会
- 松井一明 2002「堅穴住居と掘立柱建物跡」「静岡県における弥生時代集落の変遷」
静岡県考古学会
- 伊藤好夫 2002「弥生時代の生産域（水田）と集落」「静岡県における弥生時代集落の変遷」
静岡県考古学会
- 菊田 宗 2002「有東道路」「静岡県における弥生時代集落の変遷」
静岡県考古学会
- 鈴木悦之 2002「弥生時代集落の概観 中部地域一」「静岡県における弥生時代集落の変遷」

静岡県考古学会

- 保坂和博 2002「山梨県油田遺跡について」「弥生集落論」中部弥生土器研究会
佐藤由起男・秋野谷正宏
2002「遠江・駿河地域」「弥生土器の様式と編年」東海編 木曾社
岡村 涉 2002「特別史跡 登呂遺跡発掘調査概要報告書」静岡市教育委員会

写 真 図 版

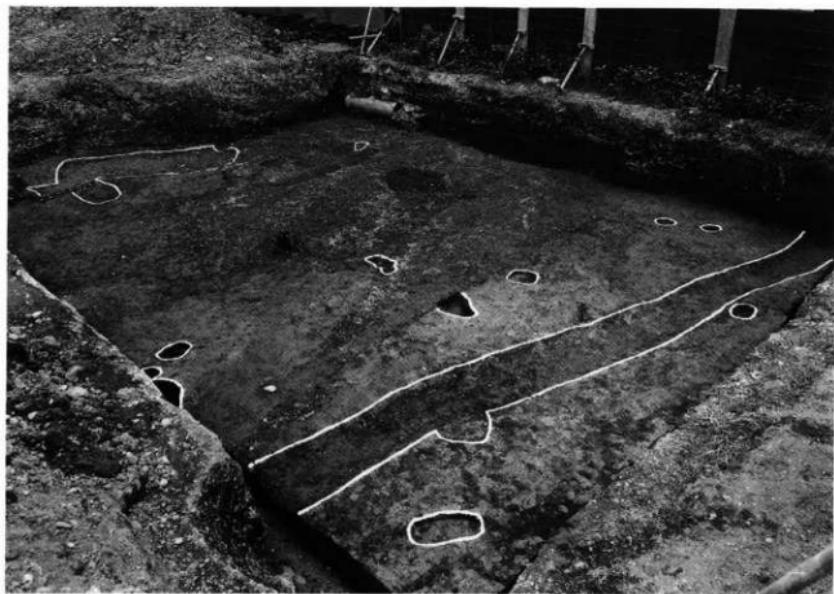


1. 調査区周辺の景観（西より、左奥は富士山、中央右が調査地点）



2. 東区全景（南西より）

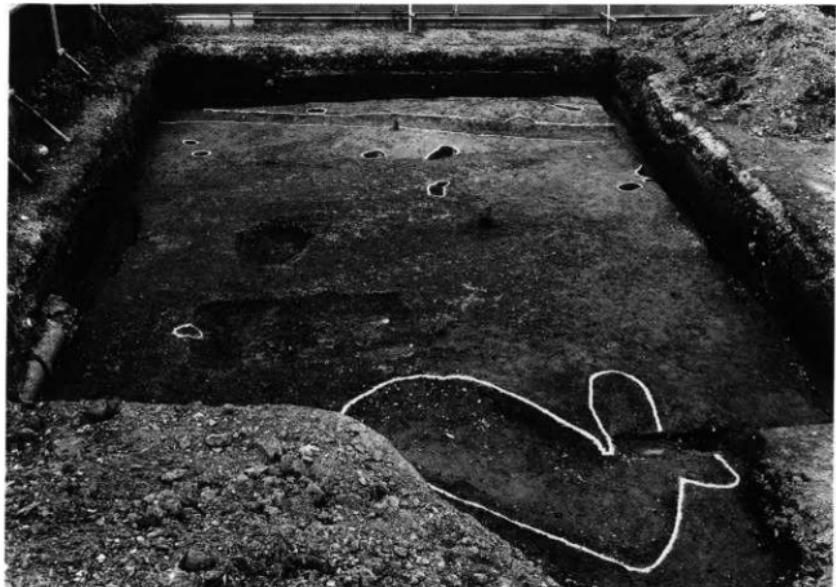
図版2



1. 西区全景（西より）



2. SK1土層断面（南より）



1. 西区全景（北東より）



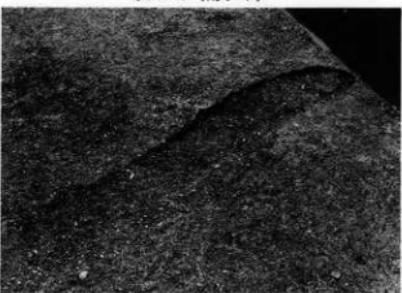
2. 有東遺跡周辺の景観（西より）



3. SK1（南より）



4. SP2・3（南西より）



5. SD1（東より）

図版4



1. SD2(北より)



2. SX1(西より)



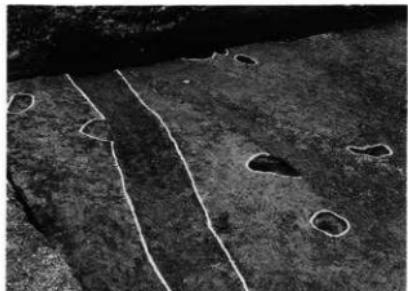
3. SX1遺物出土状況(南東より)



4. SX1遺物出土状況(南より)



5. SX1遺物出土状況(北より)



1. SF1、SP5・6・11～13（南より）



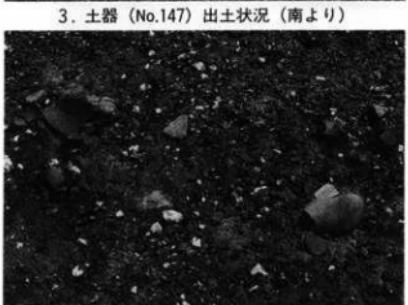
2. SF1剖物出土状況（南西より）



3. 土器（No.147）出土状況（南より）



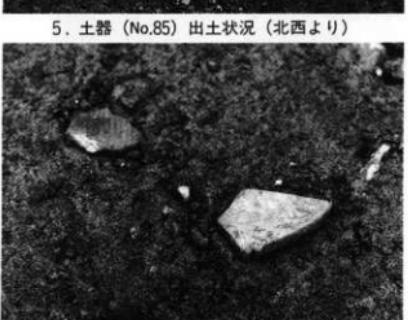
4. 石器（No.14）出土状況（北より）



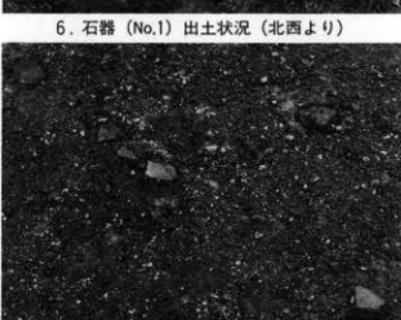
5. 土器（No.85）出土状況（北西より）



6. 石器（No.1）出土状況（北西より）



7. 土器（No.43）出土状況（北より）



8. 土器（No.40）出土状況（北より）

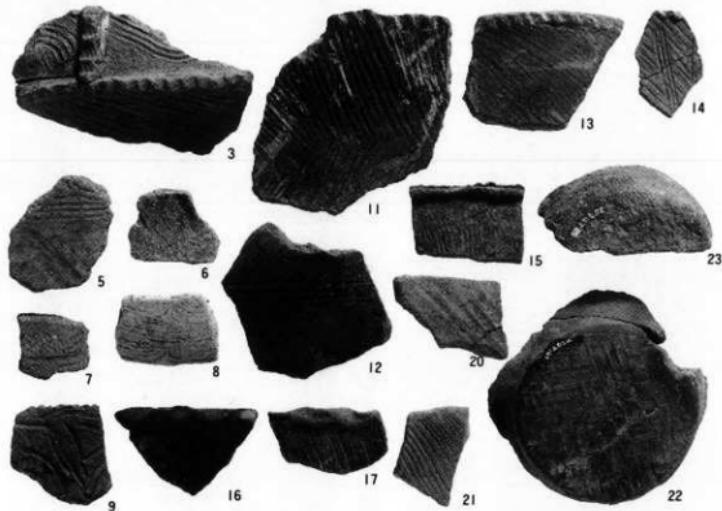
図版6



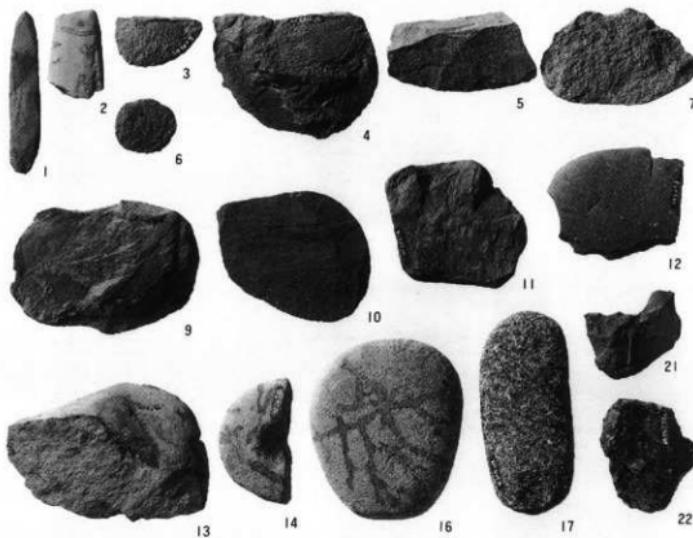
1. 西区西壁土層



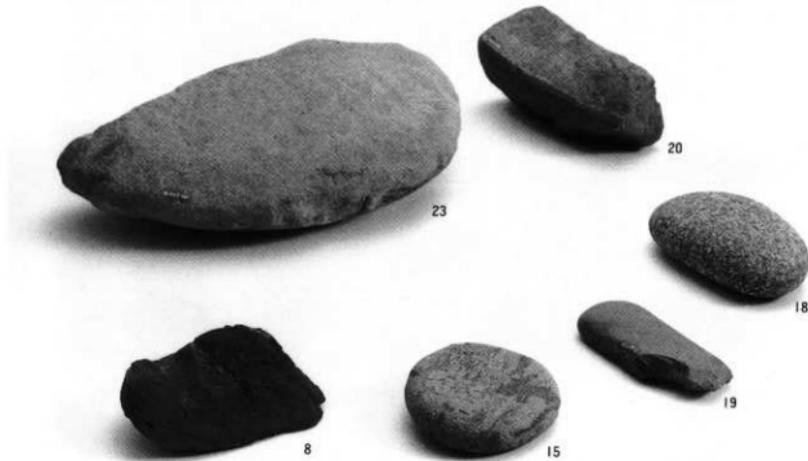
2. SX1出土土器 (1)



3. SX1出土土器 (2)



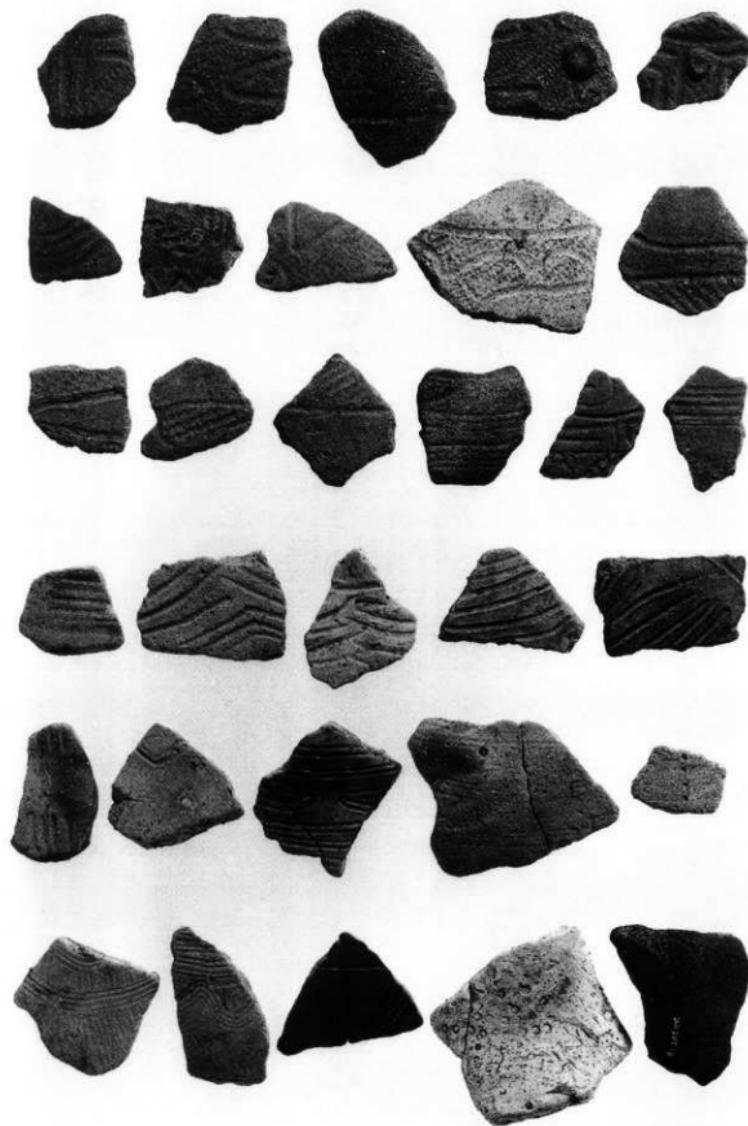
1. 出土石器 (1)



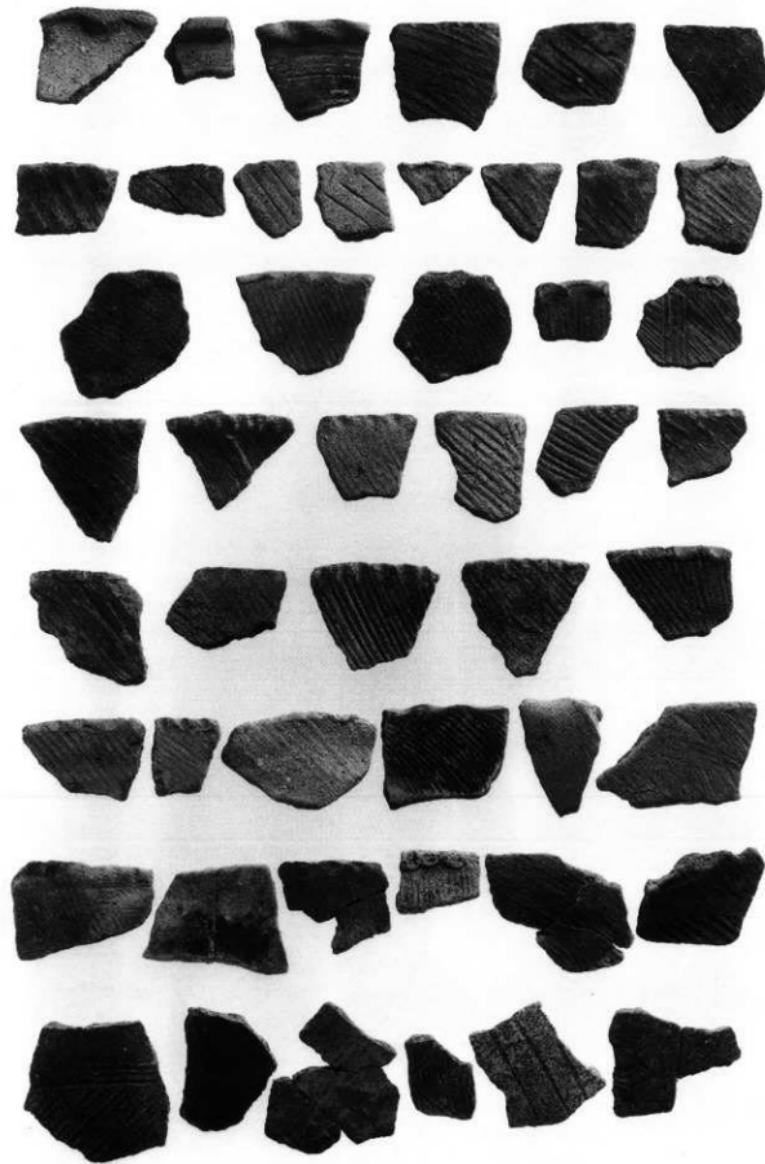
2. 出土石器 (2)



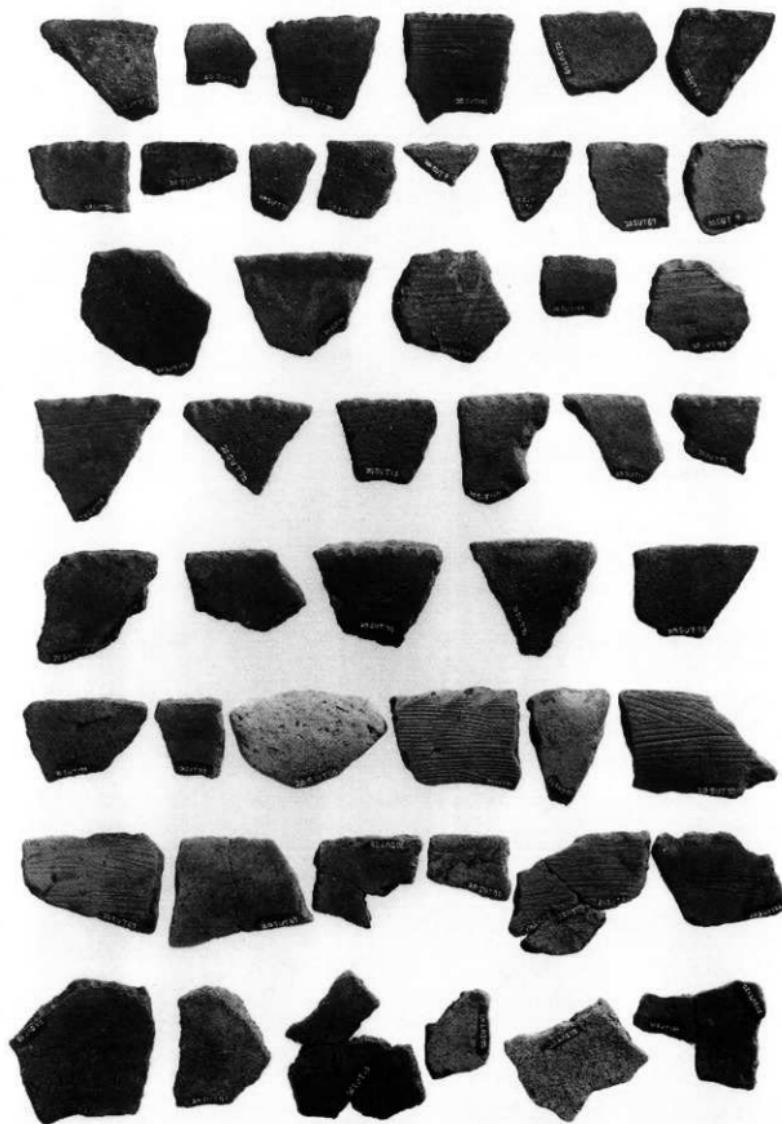
出土土器（26～53）



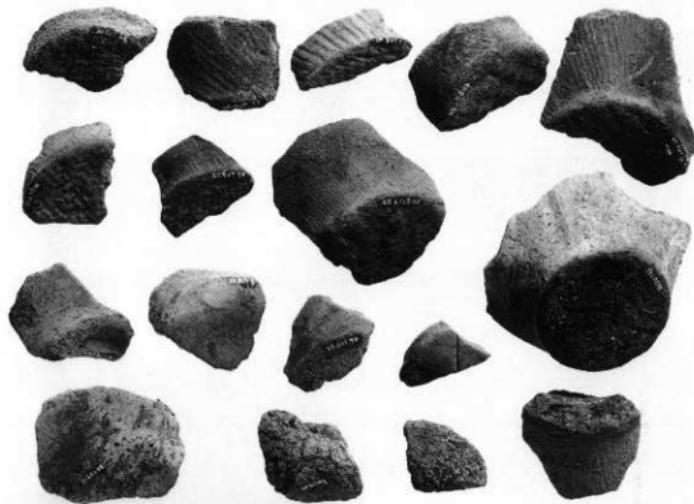
出土土器 (54~84)



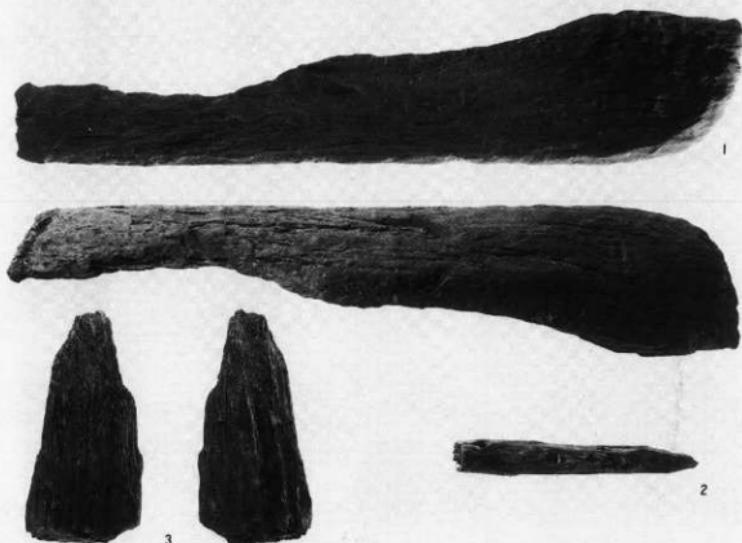
出土土器（86～133）外面



出土土器（86～133）内面



1. 出土土器 (134~150)



2. 出土木製品

本遺跡の調査を実施するにあたって、静岡市教育委員会から御協力を賜り、その他、多くの方々にお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい（順不同 敬称略）。

伊藤寿夫 山本宏司 長谷川秀厚 岡村 渉 菊田 宗 中野 有 鈴木悦之 栗原雅也
 中川律子 鈴木良孝 植松章八 高橋 和 森原明廣 柏木善治 高崎直成 佐藤由紀男
 萩野谷正宏 篠原和大 中村羊一郎 加藤理文 早瀬 賢 飯塚晴夫

報告書抄録

ふりがな	うとういせき							
書名	有東遺跡－第20次発掘調査報告書－							
副書名	平成14年度 富士見台宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第134集							
編著者名	佐野五十三 柴田 駿							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷山23-20 TEL 054-262-4261							
発行年月日	西暦2002年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
有東	静岡県 静岡市 富士見台	市町村	遺跡番号					
		22201	164	34度 57分 50秒	138度 24分 42秒	20020401 ↓ 20020531	100	富士見台宿舎新築工事
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
有東	水田 水田 集落	古墳時代 弥生時代	土坑1 小穴14 溝状遺構3 畦畔1	土師器 弥生土器 石器（鍛石5・凹石1・砥石2・剝片状石器11・台石1・石劍？1） 木製品（削物1・杭1・加工木片1） 土器片加工円盤2			中期集落の上層に水田跡	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第134集

有 東 遺 跡
—第20次発掘調査報告書—

平成14年度 富士見台宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年9月30日発行

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡市谷田23番20号
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266
印刷所 黒船印刷株式会社
〒422-8033 静岡県静岡市登呂2丁目4-25
TEL 054-286-0236㈹